師範學校

國文教科書

本科用

修正十八版

卷三

3759
Y019
資料室

42576
教科書文庫
4
810
51-1919
20000
42073

文部省檢定濟
大正八年一月十日　師範學校國語科教科書

師範學校國文教科書

吉田彌平編

本科用

卷三

東京　光風館藏版

資料室
375.9
Y019

師範學校 **國文教科書** 本科用卷三

目次

一 物の初……幸田露伴 一頁
二 をさなご……小林一茶 六
三 兒なくらむ(短歌)……九
四 皇太后陛下を悼み奉る……星野恆 一二
五 奈良の舊都……藤岡作太郎 一六
六 修善寺便(候文)……尾崎紅葉 二三
七 郭公(狂歌)……二七

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 42073 圖書

八 鍾馗……石川雅望 二九
九 尼法師その一……福地櫻痴 三〇
一〇 尼法師その二……福地櫻痴 三七
一一 尼法師その三……福地櫻痴 四四
一二 カーライルの舊栖……夏目漱石 五六
一三 ウェストミンスターとパンテオン……河上肇 六五
一四 先達……衆好法師 七四
一五 醉興……衆好法師 七五
一六 最明寺入道……衆好法師 七七
一七 熊王の發心……隱士松翁 七九

一八 英雄論その一……三宅雪嶺 八五
一九 英雄論その二……三宅雪嶺 九五
二〇 旅行……山路愛山 一〇一
二一 汽車に乘りて(新體詩)……上田敏 一〇九
二二 芳流閣……瀧澤馬琴 一一
二三 松の下露……〔太平記〕 一一九
二四 橋辨慶……〔謠曲〕 一二七
二五 秋の水(俳句)……一三五
二六 人の問に答ふ(候文)……藤田東湖 一三五
二七 長柄堤の訣別その一……坪内逍遙 一四五
二八 長柄堤の訣別その二……坪内逍遙 一五〇

附錄

第三編 音訓

一 字音……一
二 字訓……二
三 和字……一九

東京帝大圖書之印

師範學校 國文教科書 本科用 卷三

幸田露伴
文學者。文學博士。慶應三年(一八六七)生。

一 物の初

幸田露伴

よろづのもの、初こそは美はしく面白けれ。混沌わづかに剖れて天地漸く成りし時は、如何ばかり目ざましう心よかりけん。それは見ねば知らず。まづ年の首の朝ぼらけ、大路に箒目の浪清くして、千門に旗の日の紅飜るすが〳〵しさ。行きかふ人々の面の色も若々しう、悔恨を昨夜の闇の彼方に捨てゝ、希望を此の曉の風の息吹に蘇らせ、今歳はと

勇める眼の中の勢もたのもしや。

雲の扉裂けて金光迸り騰り、紅盤焰旋りて瑪瑙爛るゝ太陽のさし昇りたる、日の出づる初の景色は、春といはず冬といはず爽かなり。

樹影沈んで夕の水潤く、暮靄地に這ひて人の語靜まる時、白玉潤を含んで大いなること車輪の如き月の、薄縹の天にそつと出でたる、其の初のすゞしき心地は、之を何にか譬へん。

潮の初も亦面白し。濱の沙固うして礫やゝ乾き、汐木小白みて寄藻香を放つ干潮の極みに、沖の方漸く膨れて、さし潮の風に乘り來り、一分々々に沙を蝕ひ、礫を呑み、潮泡渚に搖ぎて豆蟹勇み奔り、海鷗天に舞ひて時に濤の頭に下り、寄藻汐木のぬれ〳〵て動かんとする折、邊波にまろぶ貝殼も艶やかに、磯石未だものいはず、濤猶怒らねど、やがては澎湃轟轟の響震天撼地の勢をなして、龍王が無字の大經卷を卷いて、又舒べて、千古萬古人間に其の讀まんことを逼る日々の凄じき業を繰返さんとする意を示せる、何ともえ云はず壯なり。

天に挺んでては白雲を駐め、日を蔽うては山逕を青むる喬樹の、其の初、杉も檜もひよろ〳〵として、松も欅もなよやかなるをかしさ。雨の膏には怡悅の目を張りて笑み、風の答には悲哀の聲を濕ませて戰けど、其の中に不屈の意氣を保ちて雪虐ぐれども偃して復起き、霜辱むれども萎けて再び

振ひ、日の父の光を慕ふ孝子の情誠に、月の母の露に甘ゆる少女の思やさしく、上に向ひ上に向ひ、自ら貞しうし自ら貞しうして終に其の生を遂げんとする勢ある、孔孟出でざるも道こゝに啓かれたりといふべし。

菽の初、菽の初、かはゆき甲拆の姿のしをらしや。地壓すれば芽ざさんとして芽ざし難きまゝ、伸びんとして屯り、身を屈めて一力入れ、根入漸く足りて辛うじて世に出でたる嫩青微綠柔かにして夢を結べる如き、さはらば消えんおぼつかなさの二葉に籠れる力こそめでたけれ。

禽の初の卵殼の中にありてひゝと鳴きたる、啐啄事了りて綿毛に風の當りたる、皆あはれに勇ましし。彼の聲には嶰竹裂けんとし、石破れんとする韻を藏し、此の姿には鐵翮颶を截りて崑崙を凌ぐ威を具ふ。

魚は苗にして江湖に遊ばんとし、蛇は寸にして藪澤に傲る。仔駒の生れて眼の色さへ定かならぬに、四蹄早くも輕く草の煙を蹴て母馬に追附き、其の乳を立飲したる、あどなくして而も至健の德を表す。獅子の兒の、怒毛もまだ硬からぬに千尺の崖より墜されて、巉巖の下に膽を張り爪を張りたる、流石に仰いで親の姿の霞に遠きを見ては、兒心の遣瀨なき思もすらんを、獸王の血統とて女々しからぬも尊し。

萬の物を觀るに、其の初皆美はしく好し。人の子の生るゝや惡相なしと聞く。物皆始有り、願ふ所は其の始有る所以

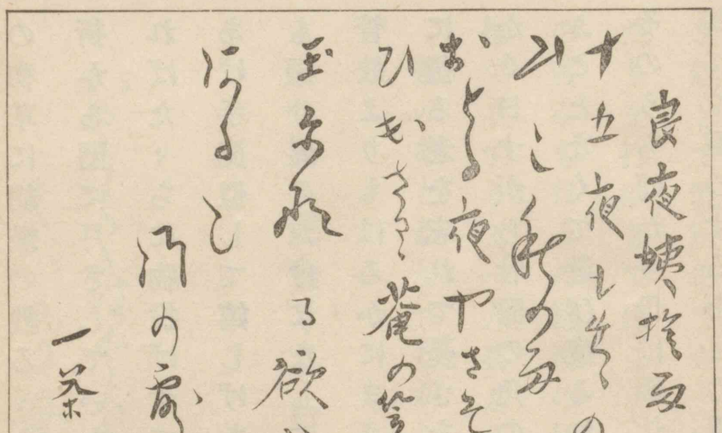
を遂げんことなるのみ。（洗心錄）

小林一茶
通稱彌太郎。信濃の俳人。文政十年（一八二七）歿す年六十五。

二　をさなご

小林一茶

こぞの夏、竹植うるころ、うき節しげきうき世に生れたる娘ものにさとかれとて名をさとゝよぶ。今年誕生日祝ふころほひになり、手うち〳〵、あはゝ、あたまてん〳〵、かぶりかぶりふりながら、同じき子どもの風車といふもの持てるを、しきりにほしがりてむづかれば、とみに取らせけるに、やがてむしや〳〵しやぶつて捨て、露程執念なく、直に外の物に心移りて、そこらにある茶碗を打破りつゝ、それも直ちに倦みて、障子の薄紙をめり〳〵むしるに、「よくした、よくした」と



小林一茶筆蹟（七番日記）

賞むればまことゝ思ひ、けらけらと笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。心のうち一點の塵もなく、名月のきら〳〵しく清く見ゆれば、なか〳〵に心の皺を伸しぬ。

又、人の來りて「わん〳〵はどこに。」といへば、犬に指さし、「かあかあは。」と問へば、烏に指さすさま、口もとより爪先まで、愛敬こぼれてあいらしく、春

の初草に胡蝶の戯るゝよりもやさしくなん覺ゆる。

折から門に月さしていと涼しく、外にわらべの踊の聲のすれば、たゞちに物投げすてゝ、片ゐざりにゐざり出でて、聲をあげ手眞似して嬉しげなるを見るにつけ、いつしかかれをも振分髪のたけになして踊らせたらんには、二十五菩薩の管絃よりもはるかにまさりて興あるわざならんと、我が身に積る老を忘れて憂さをなんはらしける。

かく日すがら牡鹿の角のつかの間も手足を動かさずといふことなくて遊び疲るればにや、朝は日のたくるまで眠る。そのうちばかり母は飯炊ぎ、そこら掃きかたづけて、やがて閨に泣聲のするを目の覺むる合圖と定め、手かしこくも抱き起して、乳房あてがへば、すば〳〵と吸ひながら、胸板のあたりを打敲きて、にこ〳〵笑ひ顔をつくるに、母は長き胎内の苦みも日々の襁褓の穢はしきも打忘れて、手の中の玉と撫でさすりて、一人喜ぶなりけり。

蚤のあとかぞへながらに添乳かな。（一茶全集）

山上憶良
奈良時代の歌人。天平五年（一三三）頃す年七十四。

三　兒なくらむ

山上憶良

おくらは今はまかるらむ兒なくらむ
そなたの母もわを待つらむぞ

僧正遍昭
良岑宗貞。六歌仙の一。寛平二年(八九〇)歿す年七十六。

たちちねはうへまきとてしもうばたまの
わが黒髪を掻でずやありけむ

菅原道真母

久方の月の桂も折るばかり
いへの風をえふかせてしがな

藤原兼輔
藤原兼輔
平安時代の歌人。承平三年(九三三)卒す年五十七。

人の親の心はやみにあらねども
子をおもふ道にまどひぬるかな

紀貫之
平安時代の歌人。古今集の撰者。天慶九年(九四六)歿す年六十五。

世の中に思あれども子をこふる
思ふにまさる思なきかな

小澤蘆庵
小澤蘆庵
京都の歌人。享和元年(一八〇一)歿す年七十九。

父母のたびなるわれをおもふらむ
まつらむさまのおもかげにして

加納諸平
加納諸平
和歌山の歌人。安政四年(一八五七)歿す年五十二。

あげまきがうかるゝ春も面白し
ふきゝ小雪山つゝらまで

大隈言道　筑前の歌人。明治元年歿す年七十一。

星野恒　漢學者。歴史家。文學博士。東京帝國大學文科大學教授。大正七年歿す年七十八。

今日見まつる少女になりぬ去年までは
一つ　してもらびしなりずや

物かげにかくれあふなるわらはさへ
遊びあまれる日のながさこのふ

咲り来てわたる童の袂より
こぼれいでたる花菫かな

四　皇太后宮を悼み奉る

星野恒

あはれ、明治天皇の御事ましくて追慕の涙未だ乾かざるに、今又皇太后宮の登遐を承りて惶愕の心擣くが如し。臣民忽ち依恃を失ひ、天地重ねて諒闇に入る。嗚呼、哀しい哉。恭しく惟るに皇太后宮德を桃花殿に毓ひて位を長秋宮に正し給ひ、明治天皇登極の初、日本帝國維新の際、聖業を九重の深きに翊けて仁風を四海の廣きに敷き給ひ、六千餘萬の衆庶、皆日月の光を齊へたるを仰ぎ、四十五年の歳月、長く雨露の惠に浴するを喜べり　あはれ、皇太后宮深仁叡德、田野の農民を憫ませ給ひては野分の風に稻葉の亂れを歎かせ給ひ、出征の將士を思ひやらせ給ひては大宮の中にも霜ふむ軍人の勞苦を體せさせ給へり。　或はかしこき御巡幸の後を守らせ給ひて、霧立ちわたる荒海の上に御心を摧き、亡

野分の風　國の爲科戸の風も心して稻葉の上はよきて吹かなん。

霜ふむ軍人　大宮の火桶のもとも寒き夜にみいくさ人は霜やふむらん。

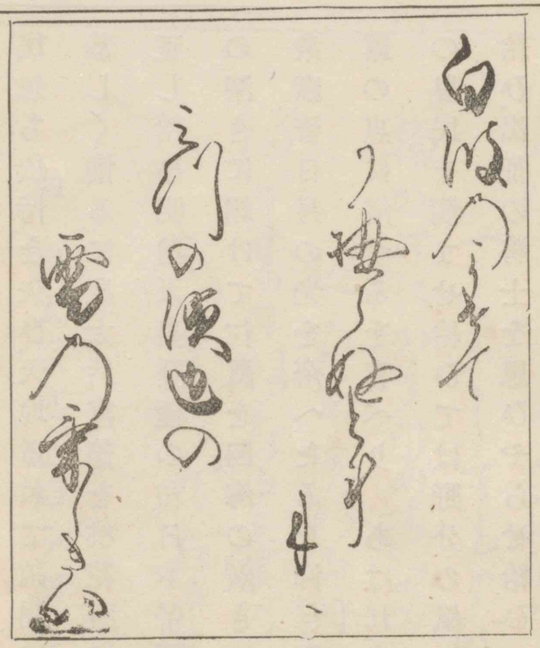
荒海の上　明治二十四年明治天皇吳佐世保の兩鎮守府へ行幸ありける、日よりまつか船の中やいかならん霧たちわたる荒海の上に。

功臣の跡　明治三十七年二月六日夜、坂本龍馬が職勝疑なき由言上するを夢み給へり。

檀林皇后
嵯峨帝の后、橘嘉智子。學館院を立つ。嘉祥三年(八五〇)崩。

仁正皇太后
聖武天皇の皇后光明子の尊號。嘗て悲田院施藥院を置き以て飢者病者を療養す。天平寶字四年(七六〇)崩ず年六十。

き功臣の跡を偲ばせ給ひて、烏羽玉の夜の御夢にさへ見そなはし給へり。女學校を興し教育を奬めて、屢〻其の庭に臨ませ給へるは、檀林皇后の懿績にも超え、病者を勞り貧民を惠み災厄に罹れる者を憐み給へるは、仁正皇太后の慈範にも勝り給ふ。後への政の御暇には、敷島の道を樂しみ、千鳥の跡をも尋ねさせ給ひて、德音萬首の上に出で彝訓



昭憲皇太后御筆蹟

百世の後に垂る。眞に是、婦道の儀刑にして內教の精粹なり。いづれの國の坤宮にか又かゝる辱き大御心はおはしますべき。あはれ、明治天皇崩御の後、御哀傷は極りなかるべけれども、今上天皇踐祚ましく〳〵て御孝養至らぬくまなければ、上下皆寶算の窮なからんことを祈り、內外齊しく慈光の愈〻遠からんことを冀ひ奉りしに、富士山の煙久しく絕えて靈藥復得べからず、靜浦の波二たび返らずして仙駕遂に停むるに由なし。臣等世々の史籍を繙き、古を稽へ今を察するにも、坤德の雙びなくましますを慕ひまつれり。いかでか天を仰ぎ地に伏して、聖壽の延べ難きを悲しまざらん。乃ち恭しく丹誠を布きて慟地の深哀を擧げ、蕪辭を捧

靜浦
駿河國沼津町の邊。御用邸のある處。

げて以て在天の慈鑒を仰ぎ奉る。

史學會評議員長文學博士　星野　恆

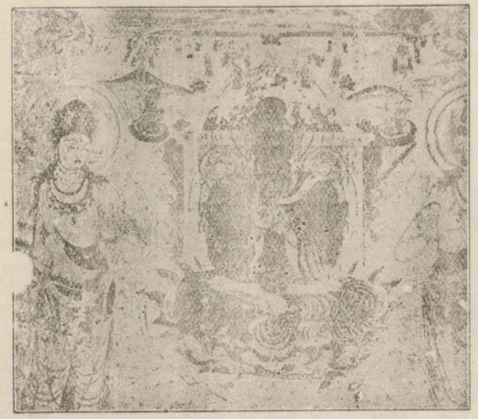
五　奈良の舊都

藤岡作太郎

藤岡作太郎　國文學者。文學博士。東京帝國大學文科大學助教授。明治四十三年卒す年四十一。

咲く花の　青丹よし奈良の都は咲く花のにほふが如くいまを盛りなり。萬葉集。

咲く花のにほふが如く盛なりし奈良の舊都を弔へば、風蝕雨打、こゝに千又二百年を過ぎたれども、七堂伽藍の偉觀今に昔の面影を殘して、そゞろにありし世を偲ばしむ。春の日うら〳〵として、志貴・葛城の峰々に霞たなびける時、まづ法隆寺を訪へ。日東帝國第一の古名刹は、寂々として菜畝麥隴の間に眠るが如し。五層の高塔は相輪高く張りて、七寶瑠璃の莊嚴を現じ、金堂中門の殿閣は畫棟雲を飛ばして推古式の遺韻を傳ふ。燭を秉つて壁畫に對すれば、諸佛踊躍として動かんとし、髣髴として名匠の神に接する思あり。



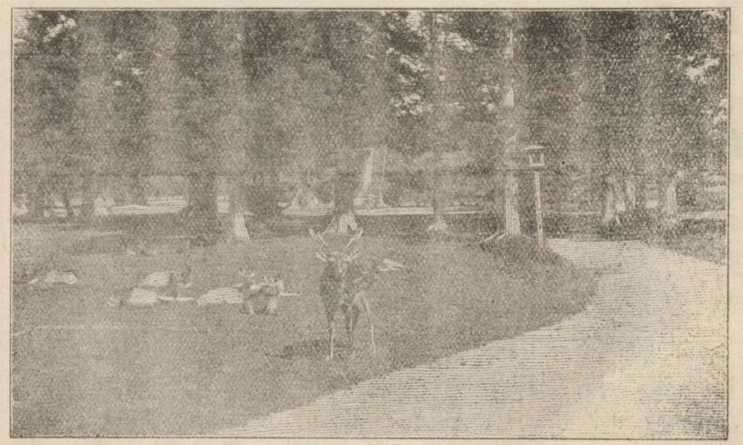
法隆寺金堂壁畫

藥師三尊・止利佛師の釋迦三尊、夢殿の觀世音、四天王の像、玉蟲廚子、橘夫人念持佛廚子何れか稀世の珍品にあらざる。

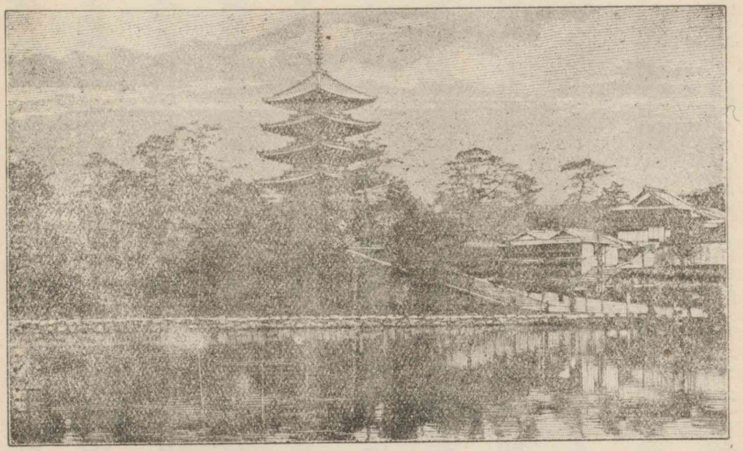
去りて舊都に向へば、春日の森は綠滴らんとし、若草山には春色滿てり。大佛殿の甍高くその間に聳えて、一抹の霞藥師寺の古塔を罩めたり。翠柳依依たる猿澤池のほとりにさまよひて、藤家の氏寺たりし興

福寺の衰殘を憐み、麋鹿濯々たる神苑をたどりて、三月堂に不空羂索觀音・梵天・帝釋・執金剛神等の名作を觀、更に東大寺に五丈三尺の大佛を仰ぎ見れば、聖武天皇の豪華の程も懷はるゝなり。天平勝寶元年のその昔帝、皇后・皇太子・文武

執金剛神像



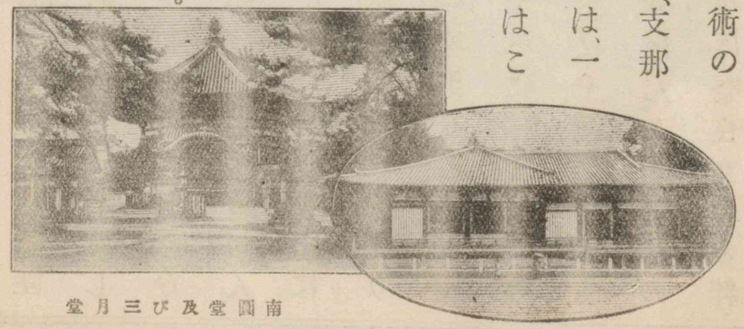
春日神社杉森



猿澤池及び興福寺

百官を率ゐて大佛を拜し、陸奥に黃金の產出せるを祝して自ら三寶の奴と稱し給ひし盛儀いかばかりなりけん。慈雲西極に靡き、法雨東陲に注ぐ盧舍那佛の尊像を繞りて、花降り、音樂聞え、讀誦梵唄の聲はた雲外に搖曳したりし有樣は、實にや極樂淨土も斯くやありけん。正倉院の勅封倉は今に奈良文化の粹

を鍾め、戒壇院の四天王は天平時代の藝術の精を凝らせり。 按ずるに、推古天皇の朝、支那との交通公に開けてより、彼の邦の文化は、一瀉千里、潮の如くに傳來し、我が邦の文化はここに一大變に際會せり。 當時、國運漸く隆昌に赴き、皇威も遠くに及び、國庫も富裕を致しければ、奈良の帝都の經營となり、七世七十餘年こゝに都して、前代に睹るべからざる燦然たる文化を現出せり。 又古事記・書紀の編纂もあり、風土記の撰進もあり、懷風藻と云へる詩集も成り、碩



南圓堂及び三月堂

犍陀羅 印度の西北ペシヤワル地方の稱。西曆一世紀より三世紀ごろの間は印度固有の形式に希臘羅馬波斯等の形式を加味したる建築彫刻盛んに出來たり。之を犍陀羅淋と稱す。

儒吉備眞備・安倍仲麿も出で、萬葉集と云へる歌集も撰せられ、歌人柿本人麿・山部赤人・山上憶良・大伴旅人・同家持等輩出せり。 帝室の歸依と人民の信仰とに依りて、佛教はにはかに興隆し、從うて美術は斐然として章をなしぬ。 大伽藍・大寺院の建築相次ぎ、彫塑・繪畫は精妙の域に到り、之に伴うて工藝も皆進歩發展せり。 されば曾て犍陀羅(ガンダラ)に於て東西特長の融和したりし、もしくは亞細亞各地に發生したりし美術の精華は、相率ゐて我が邦に注入し、こゝに凝つて奈良朝の美術を作り、わが文化史、わが藝術史に於ける最も誇るべき時代となりにき。 而して豪華を好み政教一途の皇謨を實行し給ひし聖武天皇の御宇なる天平時代は、實にその高

唐招提寺　奈良市の西一里。都跡村大字五條にあり。律宗の本山。
秋篠寺　奈良市の西北一里餘。平城村大字秋篠にあり。
修善寺　伊豆國田方郡修善寺村。溫泉あり。
尾崎紅葉　名は德太郎。小說家。明治三十六年歿す年三十七。
川向ふ　修善寺村を流るゝ桂川の向ふ。

潮期なりけり。

嗚呼、一木一草皆これ舊都の遺物ならざるはなし。流鶯飛燕豈敢へて九重の春色を飾りたるものと類を異にせんや。落日の光は唐招提寺の鴉尾に映じて、秋篠寺の晩鐘は春の入相を告ぐ。物靜かなる奈良の舊都は今や暮靄の裡に沈まんとするなり。（新體國語教本）

六　修善寺便

尾崎紅葉

再啓。昨日は雨の日暮し無聊に困しみ、夕景始めて傘擎して川向ふの小山なる賴家公の墓を拜し申候。「時政爺の邪慳何ぞ今に執着して假さゞること斯の如きや」と見るも傷はしの荒凉たる藪蔭に空しく一片の殘石を留めて、慘禍を生前に極め、恥辱を末代にさらされ候事、御身一度は征夷大將軍の顯榮にも上り給ひつる御運にして、如何なる前世の御宿業に在しけんと低回去るに忍びかね候。

尾崎紅葉

墓畔に尼將軍建立の一切經堂あり。是こそ公の奥津城にして、現在の五輪塔は、後人の、御墳無きを慨きて假に建てたるものなりとの考證これあり候。されば右の經堂の大破、安置せる丈六佛の朽廢、亦決して懷古

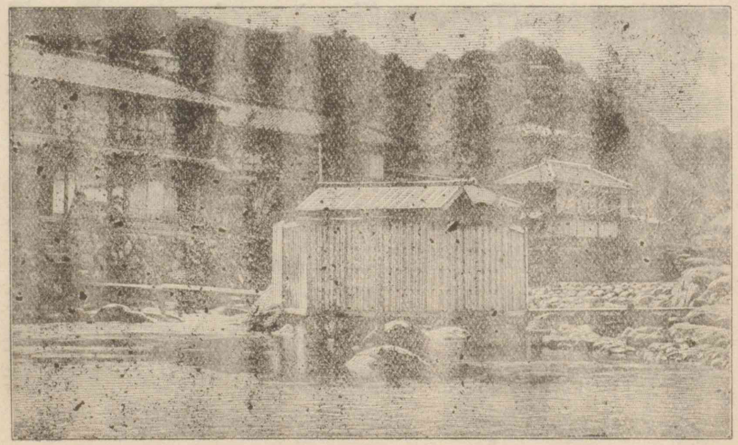
の暗涙を斂めしむべきにあらず候。蒲冠者の墳は未だ弔はず、直、隣に候へども修禪寺にも參詣致さず候。追つて一見の上申上ぐべく候。

此の日は一日閉居の餘り入浴七度に及び、剩へ連夜の按摩尤も勁く、全身綿の如く相成り、疲勞度に過ぎて終夜眠る能はず、黎明始めて交睫して覺えず十一時に至り候處、快晴の天氣玲瓏玉の如く、踊躍して獨鈷の湯の撮影を試みんと逸り候程に、過りて三脚柱の腰部をへしをり、尠からず當惑致候へども、應急の手術を施し、やをら湯の上流の淺瀨に蹈入り、ピント合せ候が、ひまどり候程に水中の赤脚寒に堪へず、而も來浴者頻々とし

獨鈷の湯 桂川の川中に涌出づ。

て然るべからざる處に長き布を翻し、或は目障の邊に着物を脱ぎ放しなど、始終ピント安を妨害致候爲、技師の難澁これに過ぎず候ひき。辛うじて一照致候へども印畫の安否甚だ心許無く存候。

それより去りて川下なる廣機の瀧に赴き、馬車屋の前なる坂道の中段に機械を立て候處、崖下なる「馬の湯」に上下



獨鈷の湯

する四足の往來ありて、屢是に道を讓るべく餘儀無くせらるゝ爲、倥偬の間に速寫機を拈りて立退き申候。此の寫眞修行の前、人の需によりて少々麁筆を揮ひ申候。然るに僻境の惡箋用ふべからずなど不足を申候處、亭主の才覺、紙門に貼りのこしの地紙裁ちて持來り候に、居然たる檀紙金砂子の好短册を得候こそ風流この上なく、感心致候へ。

二日の雨にて椎茸出來候へば味淋醬油の附燒に致候。今は春子のすがれにて、肉薄く、氣も亦微には候へ共、山廚の佳味侮るべからず、平椀中、常に幅する所の陣笠の如き物とは箸を同じうして論ずべきにあらず候。

本日は食福の日にて、午後には合宿の衆より炒豆・草餅を貰ひ、夜に入りて友人より新杵の一折を贈られ候。胃病の人、毎に餓鬼の如し。幸に食談の煩を咎め給ふなかれ。草々不盡。（草紅葉）

七 郭公

郭公　頭光

郭公自由自在にきゝ果は
酒屋へ三里豆腐屋へ二里

緑風　木端

世の中は何のへちまと思へども

頭光
本名岸誠之。寛政八年（一七九六）歿す。年七十。

木端
栗柯亭。眞宗の僧。安永二年（一七七三）歿す。

朱樂菅江
本名山崎景貫。寛政十年（一七九八）歿す年六十。

ぶりうきどきは暮されもせず
葛飾の龍眼寺に萩を見侍りて　朱樂菅江

ちぎれと見るは法寺の飾れ
ぶりもうしもはぎぶりけりて

四方赤良
本名太田覃。蜀山人。漢學者。狂歌師。文政六年（一八二三）歿す年七十五。

郭公鳴きつる方をながむれば
ただ有明の月ぞ殘れる。
後德大寺左大臣實定。

早春　四方赤良

生碎の禮者ぞ見れば大道を
横ぎりて行くは春の風

早蕨

早蕨が拳りぶりぶりぶりあげて

宿屋飯盛
本名石川雅望。國學者。狂歌師。文政十三年（一八三〇）歿す年七十八。

歌よみは下手こそ
力をも入れずして天地を動かし目に見えぬ鬼神をもあはれと思はしむるは歌なり。古今集序。

山の横つらけぶる風ぞふく
郭公に有明の月うきたる繪に
郭公鳴きつるあとにほのぼのと
淺香大寺のありあけの顏

歌人　宿屋飯盛

歌よみは下手こそよけれ天地の
動き出してたまるものは

八鍾馗　石川雅望

大臣と稱すれども隨身舍人も隨へず。降魔の利劍ありな

福地櫻痴　名は源一郎。新聞記者。戲曲家。明治三十八年歿す、年六十七。

上野　東京市下谷區にあり。德川將軍の廟所、寛永寺などあり。

から、鎭座せる社も見えず。顏に手足に朱を濺ぎて、拔身を取つて振舞はす。若し生醉かと見てあれば、桝餅を引窓から覗く。下戸か上戸か分くべからぬ文武兼備の進士の垂跡、げに千早振紙幟、仰げば愈〻軒に高し。（あづまなまり）

周耕筆鍾馗（書畫大觀）

九　尼法師その一

福地櫻痴

今年五月十五日、上野なる某院にては、彰義隊戰死の諸輩の

谷中　上野の岡の續き。

爲に二十七年忌の法會を修すと聞え、又谷中なる某寺にても同じ法會を行はると聞えたり。余は彼の彰義隊とは初より方向を同じうせざりしかば、其の諸輩とは關繫も薄く、加之余が當時の議論は慾に彼の諸輩の怒を招きて、既に其の刄の霜ともせらるべき危難に遭ひたる事もありき。されどもそは過去の事にて、今は歷史上の物語とはなりぬ。などて露ほどの恨も懼も余が心の底に殘るべき。殊更かの諸輩は同じ樣に幕府に仕へ同じ樣に主家の事を思ひたる朋輩なり。其の方向を誤りたりと云はゞ云へ、三河育ちの德川武士、飽くまで意地を張通すといふ氣象をば先祖より承け繼ぎたるは、旗本八萬騎の多かりける中に、此の諸輩

にぞありける。せめては今日の法會に値ひ、香華をも手向けて彼の冥福を祈らんものをとて、午過ぐる頃より上野谷中に詣で、形の如く其の法會も畢りて寺を出でけり。

初夏の時候とて日脚の永くしてまだ黄昏には三四時間もありぬと覺えければ、此の序に山郭公の音づるゝをも聞き、卯の花の咲出づるをも眺めばやと思ひ定めて歩を進め、根岸の里を打過ぎ、たどるとも無く三河島の里の方へ赴きたり。一叢茂る森の中に古寺の屋根の樹間より見ゆるが何と無くゆかしく思はるゝまゝに、畔道を近廻りして寺の門に入りて見たれば、元來大きからぬ本堂のなかば荒れて古さびたるに、住持の僧は庫裡にや居るらん、本堂を守る法師

根岸の里　上野公園の北麓。下谷區の内。

三河島　上野の北にあり、東京市の東北郊。

も見えざりけり。さはあれ此の寺の門に入りつる上は、爭で其の本尊に禮を行はずしてよかるべきときつと思ひたりければ、恭しく賽錢の禮物を捧げ奉りて禮拜を行ひ、事の次に境内の縱覽を許させ給へと乞ひ、其の默許を得て本堂の右手樹木ある方へぞ進みたる。此の寺の繁昌なりし頃には庭園を好事に築きたりと見えて、藻草の生茂れる池も夏草の蔓れる阜も其の餘情を留めて中々に見所あり。

斯くて此の庭を通り過ぎて生墻の外に出でたれば、こゝは卵塔場と稱ふる寺内の墓地にて、其の檀越に然るべき家の存せるが少なきと覺しくて、新しき墓石は其の數は稀にて、苔むしたる墓の碣のみ累々たり。然るに此の卵塔場の西

の隅なる一樹の栃の木の下に竹の釘貫を結廻したる中に小さき土饅頭ありて、其の上に一個の地藏尊を安置したり。其の尊像の石も臺石も、はや古色を帶びたれども、苔もむさず、傾きもせず、其の周圍に雜草一つ生さず、淸らかに掃除して、今しも汲みたる閼伽の水にて尊像も土饅頭も淨め奉り、臺石の左右の花立には榊の葉を供へ、中央の香爐に線香をぞ焚きたりける。事の體一際目立ちて由ありげに見受けられたり。此の尊像の前に一個の尼法師、年の頃は四十七八歳にもあらん、姥櫻のはや老朽ちて、顏には皺の波を處々に寄せて見る影も無けれども、其の面容眉目の淸らかなるを見れば、他目ながらも昔偲ばるゝ心地したり。肌には鼠木綿の袷衣を着、墨染の麻の衣を身に纏ひ、香染の麻の袈裟を掛け、藁蓆を敷き、端然として其の上に坐し、夕日の其の身を照して燒くが如くなるを更に心にも留めず、小さき折本の御經を兩手に捧げて、しめやかに無量壽經を讀みたるが、節も亂れず聲も澄渡りていと貴く聞えたり。

尼法師の後には二人の幼き子あり。一人は七八歳ばかりの女子にて、縹地に白く菊の花を染出して點々に紅緣の彩色したる紬の袷衣を着て、紫繻子に緋の板締縮緬を腹合せにしたる帶をやの字に結び、髮は額を切下げて禿にし、頂上に小さき銀杏返を結ひたるが、面白く、口元しまりて、愛嬌を含みたり。今一人は五六歳の男の兒にて、眼大きく頰豐か

にして軀幹の肉も滿ち、何さま逞しき武夫の嫩葉とも見ゆるが、木綿袷の上に葛の袴を裾短に着て、件の女子と共にいと大人しやかに楓の如き手を合せて、同じ樣に彼の地藏尊を拜み居たりけり。

事の體、何とは知られねども、由ありげに見えたるに、余は彼の尼法師等の勤行の殊勝なるに感じ、妨げては惡しかりなんと思ひはかり、心附かれぬ樣に去らばやとて一旦は足早に前の生墻ある方へ歩を返したりけるが、さるにても後髮引かるゝ如き念を生じて去りかねたれば、再び生墻の邊に身を寄せて暫く打見たりけるに、彼の尼法師は讀經を終へて靜かに經を懷に納め、念珠を押揉みて口の中にて佛名を唱へつゝ、尊像を仰ぎ拜しては兩眼に涙を浮べ、絶入るばかりの悲傷を幼兒等に見られんも恥かしと思ひてや、衣の袖もて落つる涙を押拭ひ、後を振向きて二人の兒女に向ひ、「いざ御別の禮拜せよ。」と誨へ、共々にぬかづきて名殘をしげに尊像の前を立ち、自ら水桶と箒とを左右の手に持ち、兒女を伴ひて庫裏の方へ赴きたり。

一〇 尼法師 その二

福地櫻痴

余は此の尼法師の體いかにも仔細ある事と思ひたれば、例の好事心にて其の樣子の聞きたき儘に、「後に續きて庫裏に往き、親しく其の人に面會せまし、さらずば住持の僧に逢ひ

て問はまし」とは考へしが、「否々、さる無遠慮の擧動すべきにもあらず」と思ひ反して、此の日はそのまゝ我が家に歸りたり。　さるにても此の一場の狀況は兎角心に蟠りて思ひ廻す程ます〳〵不審を積みたれば、遂に二日を經て十八日といふに再び彼の寺に赴き、住持の老僧に面會して彼の地藏尊の由來且は彼の尼法師の事を尋ねたるに、老僧ははたと膝を打ち、「よくこそ御尋はなされたれ。　いでや其の仔細つぶさに語り聞かせ參らせん」とて說出していふやう、

「指折り數ふれば、はや二十七年の昔語とはなりて候。　頃は慶應四年五月十五日の事なりしが、曉方より梅雨小歇なくて何と無く心細く思はれたるに、正しく上野東叡山に當り

慶應四年　この年九月明治と改元す。

て俄に砲聲の烈しく聞えたり。　何事ならんと打驚きて門外に走り出でて見れば、白き煙は森を隔てゝ彼處此處に立上り、其の上に人叫び、鬨の聲、喇叭の音、砲聲と俱に聞えたり。

「すはや上野には合戰の始つたるぞや。　御山に立籠れる彰義隊をば官軍が總攻にはしつるぞや。　早う逃げよ。　疾う走れよ。　流彈に中つて怪我なせそ。」と、老弱男女の別なく我先にと轉びつ輾びつ西へ北へと逃走れる樣は、思ひがけなき修羅の衢を唯今眼前に見る心地せられて餘りの怖さ恐しさに、拙僧は急ぎ自ら寺門の扉を鎖固め、「あはれ戰爭の狼藉を免れさせ給へ。　寺中に候人々の命の無事を守らせ給へ。」と本尊に願ぎ奉りて事の果つるを俟てる外に他事なく

候ひき。扨も其の日の未下る刻に勿體なや東台の山門・中堂・本坊を初とし奉り、一山の堂塔伽藍みな劫火の爲に黑煙と成りて炎上なし、見る目も空恐しくて候中に、落武者の後を追掛けて『彼方にては射て殺しゝぞ、此方にては打つて取りしぞ。』と門外にて往きかふものゝ噂するが手に取る樣に聞えたり。

かくて申過ぎたりと思ふ頃に庫裏の後に當りて人の呻き惱める聲の唯ならず聞えて候ひければ、愕く心を押靜めて雛僧を召具し、庭傳ひに覗ひて見れば、こは如何に、一個の武者の總身血に染み、痛手數多負ひて息も絶え〳〵なるが、裏手の墻根の隙を押破りて逃入りたりと見えて、松の樹の下に倒れ伏してぞ居たりける。急ぎ寺男ども呼集めて彼の武者を引起させて介抱したるに、年の齡は二十五六歳ばかりなる若武者にて、日の丸の袖章つけたるは、聞ゆる彰義隊の一人とは知られたり。

武者は苦しき息を吐きて、『水一口賜へ。』と乞ひて寺男が與へたる茶碗の水をぐつと呑乾して、『御情忝う候。とてもの事に早く我が首打つて此の苦痛を免れさせたまへ。』といひたり。拙僧聞きて、『思ひ寄らざる事を宣はせ給ふものかな。法師の身にて爭で人の命を絶つ法やある。追手の來ぬ間に疾く〳〵落ちさせ給へ。』と勸めたるに、彼の武者は首打振りて、『否々、今日の合戰敗北の上は、我が一命固より德川の御

家へ捧げ奉り候覺悟なれば、今更何ちへか落ち候べき。但し名もなき陪臣どもに首を取られ、德川家の砲兵組頭塙采女信繁をば何某の若黨が打取つたりと名乘られんこと屍の上の恥辱なれば、心靜かに生害せんとて追取卷きたる官軍の簇る中をたゞ一人にて打破り、根岸口より此所まで落延びて候が、今は腹かき切らんにも痛手に心屆かねば、此の上の御芳志には御引導の御介錯を賴み參らせて候なり。苦痛を救うて活すも、また殺して苦痛を免れさするも、同じ佛の慈悲にてはおはさずや。誰にてもおはせ、いざ此の腰刀にて僕が細頸落して給へよ。』と望めども、介錯せんと答ふるものは一人も候はざりき。『あな言ふ甲斐なき人々かな。

さらば苦痛を忍びて自ら生害いたし申さん。引導なして給はれかし。最後の樣の見苦しきとて嗤はせ給ふな。』と云ふまゝに、腰なる短刀拔持ちて拙僧が授けたる十念を高らかに唱へ、己れと咽喉にぐさと突立て、がばと打伏し、人々が異口同音の念佛に導かれて其の儘に絕入りたりけり。

『此の遺骸いかにすべき。市の廳へや訴ふべき、里正へや告知らすべき。いかゞはせん。』と一寺のもの打寄りて評議したりけるが、拙僧は人々に向ひて、此の塙某とやらん云へる武士が我が寺の境內にて生害し、圖らずも我等が念佛の引導を受けて往生したるも、淺からぬ因緣ぞかし。然るを其の屍を曝させんこと罪業尤も深かるべし。後日に至り公

の咎あらば、拙僧一人の身に引受けて如何なる御沙汰をも蒙らん。屍は境内の卵塔場に葬り埋めて、密に回向供養こそ致すべけれ。」と申したりければ、皆これに同じて、ともに力を合せ、其の夜の中に如法の沐浴せさせ、經帷子に着せ替へて棺に納め、讀經引導の式を密々に執行ひて後に、栃の木の下にそと葬りて其の遺骸を隱して候ひき。但し彼の武者が最後に至るまで着したる衣服・鎖帷子・大小及び所持の品品は一つ櫃に納め、他日由緣の人に尋ね合はゞ交付申さんが爲に土藏の奥深き處に祕め置きて候ひき。」

二　尼法師 その三

福地櫻痴

老僧は澁茶を余に勸め、己も飲みて咽を濕し、更に物語を續けて曰く、

「明くれば同じき十六日の午頃、拙僧に面會を求むる一個の女性あり。座敷に招じ入れて對面したるに、其の人は十八九ばかりなる勝れて麗はしき女性なるが、單衣の裾高く端折り、胸高に帶引結びてりゝしく扮裝ち、眼中血走りて半ば物狂しき顏色を顯したれども、自ら心を制してや行儀正しく初對面の挨拶をなし、詞靜かに拙僧に向ひて、「卒爾にては侍れども、昨日此の御寺に落武者の參られて候はずや。」と尋ねられたり。拙僧はつと打驚き、胸打騷ぎしかど、明らさまに云ふべき事ならねば、「否々、さる事は候はず。」と事も無げに

答へたり。『否とよ、上人、御隱しあらんは罪深うこそ候へ。わらはゝ其の落武者の由緣の者にて候。彼の人の行方生死の程を尋ね究めんとて、今朝まだきより上野・谷中・根岸と彼方此方を尋ね廻りて此の邊まで參りて候ひしが、圖らずも此の御寺の後の籬の外にて此の如く燧袋を拾ひて候ひぬ。此の袋はわらはが手づから拵へて、彼の人の上野の御山に籠らせ給ひし時に短刀の栗形に紐もて結び附けたる品にては候なり。』とて燧袋を示して、『かゝる證據の候上は、隱させ給ふは、中々に心細う覺え候。明したまへ。』とありければ、『さる證據の候上は、仕儀によりては打明くべきが、して其の殿の假名實名は。』『うたてや御僧。かの人の生死の程も知れぬ中に、彼の人の名乘を輕々しく申す者の候べしや。』『げに尤の御答よな。さあらば、若しも其の殿官軍の爲に討たれ給ひぬと申さば如何に。』『さこそは嬉しう覺え候はめ。討死は豫ての覺悟にて候ひつるものを。』『雄々しき覺悟。天晴候。但し其の殿は拙僧が計ひにて、昨夜官軍の手に降參せられて候ぞ。』『否々、彼の人に限りては力盡きて生捕にせられたらんはいさ知らず、手を束ねて降參する程の腰拔武士にては候はず。但し討死し給ひしか。然らずば生害し給ひつらんは必定と存じ候。』『さ宣ふ上は告げ參らせん。誠は昨日の夕この寺にて生害して果て給ひて候。』『それは定にて候か。して其の證は。』『御覽に入れ參らせん。』とて拙

僧はやをら立つて土藏の中より彼の一櫃を取出して、其の中より肌着・太刀など二品三品取出して女性に見せたりければ女性は兩眼に堰來る涙をば血汐に染みたる彼の武者の記念の肌着にて拭ひ、顏に押當て、わつとばかりに泣入りしが、氣を勵まして、『覺悟の上とは申しながら、生害と承り心紊れし拙き體を顯し、恥かしうこそ候へ。今は何をか包むべき、其の武士こそはわらはが二世までもと契りたる良人にて、しかも旗本八萬騎の其の中に三河御譜代の家柄と知られたる塙采女信繁と申し、武士にて候ひしなれ。』と明したり。

拙僧も此の上はとて乞はるゝ儘に、昨日落武者が最期の體

ども落も無く物語りたりければ、女性は歎の涙に咽び、聲曇らせて『未練とも思召し給ふべきが、今生の別にせめて一度死顏を見させてたばせたまへ。』と只管に賴みたり。一旦葬りたる死骸を再び掘發さんは佛家の戒と云ひ、且は憚ある事なれども、女性の心底の程も察したれば、其の夜深更に及びて寺男に吩咐けて密に掘發して、其の死顏に對面を遂げさせて、此の世の名殘を惜ませては候ひき。

女性が歎の中の喜は良人が最期の雄々しかりしこと、殊には臨終の砌に臨み、拙僧の引導に値遇して引接の悲願空しからず、攝取不捨の光明に黃泉の暗を照されて彌陀の淨土へ赴き給ふ事の有りがたさよと幾度とも無く伏拜みては

泣き、泣きては伏拜み、再びもとの如くに葬りて後に、庫裏に來り、さて拙僧に對ひて申されけるは、「わらはゝ城戸主水光高、とて三千五百石の知行を領せる旗本の二女にて、名をば兼と呼び、當年十八歳にて候。　去年七月采女のもとにとつぎて候ひしが、間もなく上國の騷にて夫にて候ひし采女は十二月の初つ方より部下の兵士を率ゐて大阪に登り、伏見の敗に手を負ひて紀州路より江戸に歸り、其の後は同志の人々と心を合せて彰義隊に加りて、常に上野に籠りて候ひき。

去る十三日の夜、駿河臺鈴木町なる邸に歸り來り、わらはに對ひて「扨も德川家の御代も今ははや限と覺ゆるぞ。　上野に籠りていたづらに官軍を引受け、一戰に及ばんこと無謀の至、迚も勝利の算はある可からずと切に諭じて諫むれども、同志の輩みな擧つて此の議に服せず、果は我をば操を變へたる臆病武者なりと嘲り、甚だしきは官軍の爲に二張の弓を引くものならんとまで疑ひ合へり。　此の上は力なし、初よりして御家の爲に、命を捧げんと疾くに覺悟を極めたる采女、明日にもあれ明後日にもあれ官軍より旗差向けられなば、眞先駈けて防ぎ戰ひ、太刀の刄の續かん程は、目に餘る寄手を引受けて切捲り、一陣全く落城に及ばゝ、潔く討死するか、さらずば生害を遂げ、德川武士の譽を後に留むべし。和御前は年若き身、殊に御父主水殿には官軍に降り、王臣と

なつて身の安泰を圖られたれば、氣遣あらじ。速かに實家に歸りて、情あらん人に見えさせ給へ。』と申されたり。

『あな情なき御詞かな。如何ならん境までも同じ路をと契りしことは皆僞言にて候ひけるか。武士の討死、忠義の爲の御最期、などて未練に止め奉るべき。御後の御供養はわらはよきに計ひ奉らん。さりながら強ひての討死は武士の不覺とやら承りて候へば、必ずともに早まりて犬死なしたまひそ。』と、胸の痛の碎くるばかりなるを押忍びて勇め勵ましまゐらせしが、覺悟の上とは云ひながら今生の愛別離苦にてこそ候ひしか。

さる程に昨十五日の上野の戰爭、良人の身の上如何ぞと心も心ならず、落城と聞くと其の儘に邸をそと駈出して上野までひた走りに走りつきたるに、官軍の兵士前後の門を取固めて入らせねばせんかたなく取つて返し、今朝まだきより再び上野に參り、彼方此方に討死し給へる方々の死骸を見たれども、夫の形の見えざれば、是までは辿りて候ひしなり。それにつけても、是なる唐の鏡は、わらはが最愛したる品にて候ひつるを、十四日の曉に夫の立出で給ひしとき、御身の護に候へば、肌に附けさせ置きたまへと奉りしを、最期の際まで持たせ給ひしこそ嬉しうは候なれ。とはいへ、是が記念と成つたるか。』と、流石に猛き女性も歎に前後の辨も無かりけり。

其の後は此の女性七々日が間は忍びやかに毎日佛參して怠らず。中陰百箇日の法會も人目に立たざる樣に執行ひ、若干の黃金を持來りて、亡夫の石碑を建てんと乞はれたり。されども其の頃は朝敵たる賊兵の墓碣、明白に建てんこと公への憚ありければ、わざと地藏尊の像を刻ませて標となし、亡き人の戒名は位牌に記し、我が寺の過去帳にも書入れ、其の事の由は密に書留めて祕置きて候なり。

かくて女性は其の翌年亡夫の一周忌と申しゝ時に、一人の孩兒を懷かせて參詣なし、『扨も此の娘こそ亡夫の忘れがたみにて、昨年七月誕生いたして候なれ。夫が最期の砌に佛の道に入らばやとは存じ候ひしが、今日まで猶豫ひしは此の故にて候ひしぞ。』とて、拙僧を請じて導師と賴み、十九歲と申しゝに綠の黑髮をば煩惱の雲と共に切拂ひて、夫の實名と己の呼名とを合せて信兼尼とは法名を附けたり。

かくて其の後この尼法師の信兼尼は道德堅固に佛門の修行をなしたりければ、二十餘年の勤行にて、今は一宗の長老上人たちもをさ〳〵及ばぬ程の碩學とは成らせられたり。東京におはする時は毎月三四回は墓參を怠らせ給はず。偶〻錫を飛ばして諸國を修行し給ふにも、五月十五日には必ず歸り來りて法の如く詣で給ふなり。足下が先の日に見給ひしは即ち其の尊き參詣にては候ひけるぞや。又その時に伴ひ給ひし兒女は、其の男兒は信兼尼の孫の某、その女

兒は實家城戸某の娘、この兩家とも由緣の人々は少なく成りゆきて、今は此の男女二人のみ殘りて、是も尼が養ひ育て給ふなり」。

右は老僧が長々の物語なり。此の尼法師の身の上および二人の兒女を尼が育める事に就きて猶聞きたる物語もあれど、茲には記さず。尼が今の住居かつは三河島の寺の名も顯に記すは尼の意に悖る恐ありと老僧が止められたる故に、余も其の意に從ひて言はず。唯この尊き尼法師の貞節を記すに筆を止むるなり。（江山烟雲）

夏目漱石
名は金之助。英文學者。小說家。大正六年歿す年五十一。

一三　カーライルの舊栖

夏目漱石

毎日の樣に川を隔てゝ、霧の中にチェルシーを眺めた余は或朝橋を渡つて其の有名なカーライルの舊宅を尋ねた。四階造の眞四角な家である。此の家の石階の上に立つて、鬼の面のノッカーをこつ〳〵と敲く。暫くすると、內から五十恰好の太つた婆さんが出て來て、「おはいり」といふ。最初から見物人と思つて居るらしい。婆さんはやがて名簿の樣なものを出して、「御名前を」といふ。余は倫敦滯留中、四たび此の家に入り、四たび此の名簿に余の名を記錄したが、此の時は實に余の名の記入初であつた。

婆さんがこちらへといふから左手の戸をあけて町に向つた部屋にはいる。是は昔客間であつたさうだ。色々な物

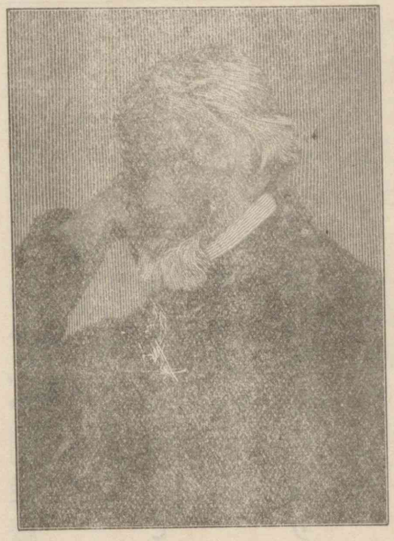
が並べてある。壁に畫やら寫眞やらがある。大概はカーライル夫婦の肖像の様だ。後の部屋にカーライルの意匠に成つたといふ書棚がある。それに書物が澤山詰つて居る。それから二階へ上る。こゝにも亦大きな本棚があつて本が一杯詰つて居る。やはり讀めさうもない本、聞いた事のない本いりさうもない本が多い。

案内者はいづれの國でも同じものと見える。さつきから婆さんは室内の繪畫器具に就いて一々説明を與へる。五十年間案内者を專門に修行したのでもあるまいが、非常に熟練したものである。何年何月何日にどうしたかうしたと恰も口から出任せに喋舌つて居る様である。しかも其の流暢な辯舌に、抑揚があり、節奏がある。調子が面白いから其の方ばかり聽いて居ると、何を言つて居るのか分らなくなる。婆さんは人が聽かうが、聽くまいが、口上だけは必ず述べますといふ風で、別段厭きた氣色もなく、何年何月何日をやつて居る。

余は東側の窓から首を出してちよつと近所を見渡した。眼の下に十坪程の庭がある。右も左も又向ふも石の高塀で仕切られて其の形はやはり四角である。四角はどこ迄も此の家の附屬物かと思ふ。

カーライルいふ、裏の窓より見渡せば、見ゆるものは茂る葉の木株、綠なる野原、及び其の間に點綴する勾配の急なる赤

き屋根のみ。西風の吹く此の頃の眺はいとはれやかに心地よし。」余は「茂る葉」を見ようと思ひ、「綠の野」を眺めようと思つて、實は裏の窓から首を出したのである。



カーライル

首はすでに二遍許出したが、青いものも何にも見えぬ。右に家が見える、左に家が見える、向ふにも家が見える。其の上には鉛色の空が一面に胃病やみの樣に不精無性に垂れかゝつて居るのである。余は首を縮めて窓から引込めた。案内者はまだ何年何月何日の續

きを朗に諳誦してゐる。

カーライル又いふ、「倫敦の方を見れば眼に入るものはウェストミンスター、アベーとセント、ポール寺の高塔の頂のみ。其の他幻の如き殿宇は煤を含む雲の影の去るに任せて隱見す。」「倫敦の方」とは既に時代後れの語である。今日チェルシーに來て倫敦の方を見るのは、家の中に坐つて家の方を見ると同じ理窟で、自分の眼で自分の見當を眺めるといふのと大した差違はない。然しカーライルは自ら倫敦に住んで居るとは思はなかつたのである。彼は田舍に閑居して、都の中央にある大伽藍を遙かに眺めた積であつた。余は復た首を出した。そして彼の所謂「倫敦の方」へと視線を

延した。併しウェストミンスターも見えぬ、セントポール寺も見えぬ、數萬の家、數十萬の人、數百萬の物音は、余と堂宇との間に立ちつゝある、漾ひつゝある、動きつゝある。一八三四年のチェルシーとはまるで別物である。余は復首を引込めた。婆さんは默然として余の背後に佇立して居る。

三階に上る部屋の隅を見ると、冷にカーライルの寢臺が横たはつて居る。青い戸張が物靜かに垂れて、空しき臥床の裡は寂然として薄暗い。木は何の木か知らぬが、細工は唯無器用で素朴であるといふ外に、何等の特色もない。其の上に身を横たへた人の身の上も思ひ合はせられる。傍には彼が平生使用した風呂桶が九鼎の如く尊げに置かれてある。

風呂桶とはいふものゝバケツの大きいものに過ぎぬ。彼が此の大鍋のなかで、倫敦の煤を洗ひ落したかと思ふと、益、其の人となりが偲ばれる。ふと首を上げると壁の上に彼が往生した時に取つたといふ漆喰製の面型がある。此の人だなと思ふ。此の巨燵位の高さの風呂に入つて、此の質素な寢臺の上に寢て、四十年間やかましい小言を吐續けに吐いた顏は、これだなと思ふ。婆さんの淀みなき口上が電話口で横濱の人の挨拶を聞く樣に聞える。

階段を下りて、勝手口から庭に案内された。例の四角な平地を見廻して見ると、木らしい木、草らしい草は、少しも見え

ぬ。婆さんの話によると、昔は櫻もあつた、葡萄もあつた、胡桃もあつたさうだ。

カーライルが麥藁帽を阿彌陀に被つて、寢卷姿のまゝ衙へ煙管で逍遙したのは此の庭園である。夏の最中には蔭深き敷石の上に、さゝやかな天幕を張り、其の下に机をさへ出して餘念も無く述作に從事したのも、此の庭園である。星明かなる夜、最後の一服をのみ終つたのち、彼が空を仰いで、「嗚呼予が汝を見るの時は瞬間の後ならん」と叫んだのも此の庭園である。

余は婆さんの勞に酬いる爲に、婆さんの掌の上に一片の銀貨を載せた。「有難う」といふ聲さへ朗讀的であつた。一時間の後、倫敦の塵と煤と馬車の音とテームス河とは、カーライルの家を別世界の如く遠き方へと隔てた。（獻石全集）

ウェストミンスター寺院　英國倫敦なる古き寺。英國の偉人の墓多し。

バンテオン　佛國巴里なる寺。佛國の偉人の墓多し。

河上肇　經濟學者。法學博士。京都帝國大學法科大學教授。

一三　ウェストミンスターとバンテオン

河上肇

倫敦のウェストミンスター寺院は、偉人國葬院とも謂ふべき處である。巴里のバンテオンも、略〻之に似たもの。

倫敦に最初行つた時は、僅か一週間滯在したゞけであるが、其の一週間の中に三度も行つた程、ウェストミンスター寺院は私の氣に入つた。始めてウェストミンスターに行つた時、人々何れも帽を手にせるを見て、西洋の儀禮をば少し

も心ゐぬ私でありながら、直に、寺院では帽子を脱ぐものだなと氣附いた。それほど全體の空氣が落ちついて居て、何にも人の心を靜める感じがした。さうして隅から隅まで案内者なしに、自分一人で思ふがまゝに逍遙することの出來たのは、如何にも悦ばしかつた。無料では入れぬ處でも、一定の金さへ拂へば、何時でも何時までも思ふがまゝに逍遙することが出來た。

ウエストミンスター寺院

フォーセット
英國の經濟學者。
(1833-1884)

ダーウィン
英國の生物學者。
(1809-1882)

經濟學者ではヘンリー、フォーセットの半身像が此處に在る筈であるのに、第一日目には其を見落してしまつた。二日目には是非探し出したいと思つたが、容易に見つからぬ。それもその筈、往來止にしてある片隅の室の遙か奥の方に半身像が懸けてあるのであつた。併し遠くから薄暗い壁に懸けてある半身像を兎も角も認め得た位だから、悠々と此の寺院の内を逍遙ふことの出來ることも推して知るべきである。進化論で有名な彼のダーウィンの葬つてある其の床石の上でも、私は樣々の事を思ひ浮べながら、飽くまで佇むことが出來た。ダーウィンの半身像の懸つて居るすぐ傍の壁には「エネルギー不滅の法則」を考へ出したジュ

ジュール　英國の物理學者。(1814-1889)
ニュートン　英國の數學者、物理學者。(1642-1727)
ハーシェル　英國の天文學者、物理學者。(1792-1871)
ワット　英國の機械學者、發明家。(1736-1819)

ールの爲の記念板がある。

此の牌はジェームス、プレスコット、ジュールを永遠に記念せんが爲結合したる諸國の人々によりて、茲にニュートン・ハーシェル及びダーウィン等の墳墓に近く置かる。と云ふ牌銘も、私は之を手帳に書きとめることが出來た。

ジェームスワット

幾度か私の論文や著書に引合に出した蒸氣機關の發明者ジェームス、ワットの石像もある。ガウンを着て椅子に腰を掛け、左脚を後にひいて右脚を前に出し、紙を膝の上に展べ、左手に其の端を抑へ、

右手にコムパスを握つて居る。臺石の表面を見ると、其には次の如き意味の文字が彫りつけてある。

此の國の國王・諸大臣並に貴族・平民の多くの者ども、此の記念像をジェームス・ワットの爲に建てたり。そは彼の名を永遠に傳へんとてには非ず。彼の名は平和の事業の榮ゆる限、かゝる記念像を俟たずして永遠に傳はるべし。此の像は人間が彼等の最上の感謝に値する所の人人を、尊敬することを知れりと云ふ證據を示すために建てたるものなり。

思ふに、彼の產業革命、延いて現代の物質的文明を人間化すれば、そこにジェームス、ワットの塑像が出來る。私は今親

しく其の偉大なる塑像の前に立つて、彼の生涯を懷ひ、又産業革命の偉業を思うて、萬感の徂徠するに涙を催さんばかりである。記念像の下に彫りつけてある幾行かの文字も、實にゆかしきものである。私は行を追うて丁寧に其の文句を手帳に寫し取りながら、日本にも若しかゝる場所があるならば、私は子供等の教育のため屢、そこへ連れて行きたいものだと思つた。

その後、私は巴里に移つて、パンテオンを見に行つた。こゝではその墳墓のある洞窟を見るのに、案内者に就かねばならぬ。時を定めて案内者が觀覽者を集める。其の時それについて入るのである。一人の案内者が何十人かの群を

ルソー　佛國の哲學者。(1712-1778)
ヴォルテール　佛國の文學者。(1694-1778)
ユーゴー　佛國の思想家、詩人。(1802-1885)
ゾラ　佛國の小說家。(1840-1902)

引連れ、薄暗い洞窟の中を、出來得るだけ急ぎながら、只時折立ちどまつて若干の說明をするだけなので、一分間たりとも落ちついて英雄の墳墓を仰ぎ、追慕の念を催し、懷古の情に耽る遑がない。此がルソーの墳墓である、彼がヴォルテールの墳墓である、こゝにユーゴーが眠り、そこにゾラが眠つて居ると云ふかと思へば、はや先頭は他の場所へと進むので、何一つとして頭に殘りやうが無い。もうお仕舞だと見えて、そこに出口がある。戸の外に例の案内者が立つて居て、銘々から思召の金を貰つて居る。皆が金を遣ると、どうんと戸を閉めて錠を下す。それでお仕舞である。次には復、何十人かの見物客を引連れて同じ事を繰返す。此の

如くにして、案内者のポケットは相當に膨れるであらう。私は敢へて一法二法の金を惜しいとは思はぬが、何遍這入つても同じ事だから、巴里には七十日も居たけれど、二度とは行かなかつた。

パンテオン

此のパンテオンにはかつてミラボーが國葬された。然るに其の國葬が營まれてから僅か三年目に、議會では、彼の骸骨を掘返して其の代りにマラーを葬ることを決議した。かく

ミラボー 佛國革命時代の雄辯家。(1749-1791)

マラー 佛國の革命家。(1744-793)

てミラボーの死骸は或夜、此のパンテオンから持ちだして、或他の墓地に改葬された。マラーが暗殺された事は當時甚だしく巴里人の血を涌かしたものと見える。然るに此のマラーの死骸も、三ヶ月目に又此處を追出されて、他の墓地に埋められる事に爲つた。えらい事をしたものだ。併しそれが巴里人であり、それがパンテオンである。

考へて見れば、此のパンテオンの墳墓室はやはり例の案内者について、出來得るかぎり遽しく見て廻るべき場所なのである。堂前に建てられてある「考へる人」と題するロダンの作品は裸體の男が左腕を膝に突き、掌を以て額を支へて居る銅製の巨像であるが、背面の建築と如何にも不調和に

ロダン 佛國の彫刻家。(1840-)

見える。併しパンテオンの歴史、巴里の歴史、從つて佛蘭西の歴史を知る者にとつては、此のロダンの作品こそ替へも動かしもならぬパンテオン堂前の闕くべからざる裝飾である。（祖國を顧みて）

一四　先達

兼好法師

兼好法師　吉田兼好。本姓卜部。觀應元年（一三五〇）了年六十九。

仁和寺にある法師、年よるまで石清水をがまざりければ、心うくおぼえて、或時思ひ立ちて、たゞ一人かちより詣でけり。極樂寺・高良などをがみて、かばかりと心得て歸りにけり。さてかたへの人にあひて、「年頃思ひつること果しはべりぬ。聞きしにもすぎて貴くこそおはしけれ。そも參りたる人ごとに山へ登りしは何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へ參ることそほいなれと思ひて、山までは見ず。」とぞいひける。

少しの事にも先達はあらまほしき事なり。（徒然草）

一五　醉興

兼好法師

これも仁和寺の法師、わらはの法師にならんとする名殘とて、各あそぶ事ありけるに、醉ひて興に入るあまり、傍なる足鼎を取りて頭に被きたれば、つまるやうにするを、鼻をおし平めて舞ひいでたるに、滿座興に入ることかぎりなし。暫し奏でて後、拔かんとするに大方拔かれず。酒宴事さめ

浮田一蕙筆（國華）

て、いかゞはせんと惑ひけり。とかくすれば、首のまはり缺けて、血垂り、たゞ腫れに腫れて、息もつまりければ打割らんとすれど、たやすくわれず、響きて堪へ難かりければ、叶はで、すべき樣なくて、三足なる角の上に帷子を打懸けて、手を引き、杖を突かせて、京なる醫師がりゐて行きけり。道すがら人の怪しみ見ること限なし。醫師のもとにさし入りて向ひ居たりけん有樣、さこそは異樣なりけめ。物をいふも、くゞもり聲に響きて聞えず。「かゝることは書にも見えず、傳へたる教もなし」といへば、また仁和寺に歸りて親しき者、老いたる母など枕がみに寄りゐて泣き悲しめども、聞くらんとも覺えず。かゝるほどに、或者のいふやう、「たとひ耳鼻こそきれうすとも、命ばかりはなどか生きざらん。たゞ力を立てゝ引きたまへ」とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てて首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻缺けうげながら拔けにけり。辛き命まうけて、久しく病み居たりけり。（徒然草）

最明寺入道　執權北條時頼。出家して鎌倉山内の最明寺に入る。

一六　最明寺入道

兼好法師

平宣時 大佛氏。北條時政四世の孫。

平宣時朝臣老の後、昔語に、「最明寺入道、或宵の間に呼ばるゝ事ありしに、『やがて。』と申しながら、直垂の無くて、とかくせし程に、また使來りて、『直垂などの候はぬにや。夜なれば異様なりとも疾く。』とありしかば、萎えたる直垂うち〳〵のまゝにてまかりしに、銚子に土器取添へてもて出でて、『この酒を一人たうべんがさう〳〵しければ申しつるなり。下物こそ無けれ、人は靜まりぬらん、さりぬべき物やあると、何處までも求めたまへ。』とありしかば、紙燭さして、くま〳〵を求めし程に、臺

北條時頼（京都萬壽寺藏）

所の棚に小土器に味噌の少しつきたるを見出でて、『これぞ求め得て候。』と申しゝかば、『事足りなん。』とて、快く數獻に及びて興に入られ侍りき。その代には斯くこそ侍りしか。』と申されき。（徒然草）

隱士松翁 傳未詳。吉野朝時代の人。

大夫判官 五位の檢非違使尉。

住吉の戰 正平七年。攝津國住吉にて楠木正行、細川顯氏の軍を破る。

一七 熊王の發心

隱士松翁

大夫判官赤松光範が津の國のかためなりける時、左馬頭正儀に度々謀られけるを、くちをしく思ひこめて過したりけるに、去ぬる住吉の戰に討たれて失せし宇野六郎といひしが子に熊王といひけるが、まだをさなきとき、光範にいひけるは、「正儀は我がためにも親の敵にて候へば、いかにもして

討ち侍らん。河内へ越えて正儀に仕へ侍らんに、をさなく候へば、などか心を許し申さぬことのあるべき。たとひ心を許すことのあらずとも、七年八年ほども仕へ候はゞ、そのうちには討ちぬべき便の、爭でなからん。御暇をこそ賜はらめ。」と涙を流せば、光範もいとあはれに思ひながら、「幼ければ、敵の國へやらんも心もとなし。又は命に代りて討たれしものゝ子なれば、かたみとも思ふべければ。」と強ひて止めたまひけれども、「少し大人しくなりなば、よも近づけたまはじ。をさなくありなんとき參りてこそ。」としきりにのぞみければ、力及びたまはで、常に身を放ちたまはざりし刀を賜ひて、「これにて本意とげよ。」とて、阿倍野まで人あまた添へて

阿倍野　大阪市の南、住吉の北。

やらせけるに、それよりは我に等しき童一人を具して、赤坂の城に行きてそのほとりに佇みてありけるを、兵庫介忠元が見つけて、「いかなる人にかおはすらん。」と尋ねられて、「われは大夫判官光範の侍にて宇野六郎といひけるものゝ小子に熊王といへる者にてこそ候へ。父にて侍る六郎は去にし時住吉の戰に討たれて候を、一門にて侍る備後守が我を追ひうちて領地を奪ひ候へども、光範と力を合せ候へばせんかたなくて、いかなる寺へも入り侍りて、僧法師にもなり父の跡を弔ひ候はんがためにさすらへ侍り。」といひけるを、あはれと聞きて、まづ我が方に伴ひて様々勞りて、後に正儀に、ありつる事を語りて、「をさなくは候へど、心のさか〳〵し

くて。」など申すに、あはれがりたまひて召寄せたまへり。もとより情ある人なりければ熊王も思ひ附きて、親の仇をも忘れにけるにや、よく宮づかへにけり。十五ほどになりければ、「河内の國にて少しなる處を取らせん。」といひけれども、「いかで、恥ある一矢をも射さぶらひてこそ。」とて辭しにけり。

明くる年の春、父が七周に當りけるに思ひつけて、「今宵、正儀を討ちて父の手向にもし、光範の心をも安め奉らん。」とおもひたちてありけるに、その日御前に召して、「今日は吉日にてあるなれば元服せよかし。」とて、和田和泉守に髻あげさせて、和田小次郎正寛と名のらせ、吉野殿よりたまはせたる鎧を

和田和泉守　和田正實。

賜ひければ、涙を袖にかけて喜ぶ。夜に入るまで正儀の御前にありけるが、またふと思ひ出でて、「討ち奉らんならば、今宵こそ。」とおもひて、膝をおしなほして正儀に目を懸くれば、年頃の情深かりしこと、今日の元服の事など思ひ續けて、「いかで情なく討ち奉らん。」と思ひかへして心を鎭むれば、「父の敵といひ、譜代の主君の仇といひ、一方ならねば。」と思ひ定めけれども何心もなくわたらせたまふ有樣を見ければ、御いたはしくて堪へかねけるにや、廣緣に出でて聲をあげて泣き號ぶを、人々も正儀も覺束なく思ひたまうて障子を開きみたまへるに、伏沈めるさまのたゞには見えずありければ、「いかに。」と問はせたまひければ、ありつる心のうちをまをし

て、「とにかくに、君のため、先君のため、父のために自ら死なんより外は候はず。」とて刀を取りなほせば、ありつる人どもみな涙にくれてありながら、「いかでさはあらん。」と、とりつきてはたらかせねば、力及ばで、その刀にて髻おしきり、往生院にて形をかへ、君より賜はせたる名なればとて正寛法師とぞいひける。寺の傍に草の庵を結びて、「もしも心のかはることのありもやせん。」とて、往生院の門の外へは出でずして行ひてありけり。光範より賜はせける刀は、ありし有様をくはしく書添へて返しけりとかや。いとあはれなりける事にこそ。（吉野拾遺）

往生院　河内國南河内郡池島村にあり。

一八　英雄論　その一

三宅雪嶺

三宅雪嶺　名は雄二郎。批評家。哲學者。文學博士。萬延元年（一八六〇）生。

英雄とは何ぞや。之に就いて人互に見を異にし、動もすれば正反對に分る。非常として尊崇するものは曰く、「國家は一人を以て興り一人を以て亡ぶ。」曰く、「拔山倒海の勇、旋乾轉坤の智。」曰く、「デミゴッド。」と。唯其の性行を誇張して辭の足らざらんことを恐る。凡常として冷視する者は曰く、「一盛一衰一起一仆、皆時勢に非ざるはなし。英雄も亦時勢の傀儡に過ぎず。」曰く、「英雄崇拜は愚人の妄想のみ。」と。唯其の事業を貶黜して語の足らざらんことを恐る。惟ふに人の英雄を見る概ね此の兩樣に分ると雖も、斯の如きは獨り英雄に限るに非ず、萬般の事皆然り。卽ち一は差別門よ

りし、一は平等門よりし、觀察の點各同じからざるなり。譬へば俚諺に人心の殊なる猶其の面の若しといへる類か。實に人心の殊なること洵に其の面の如きものあるに似たれども、しかも人の面貌は特に著しき異同あるに非ず、其の彼此互に一ならざるは要するに分釐の差を以てのみ、固より縱目横鼻の特異あるにあらざるなり。更に譬へば宛も人の身材の相等しからざるが如きか。大小長短の異なるありと云ふも、若し五尺數寸を普通とせば、此より一尺高き者は大漢と稱せられ、此より一尺低き者は侏儒と名けられ、個々に較視すれば頗る等差あるかの如くなれど、多數を概觀せば寧ろ均一と謂ふの妄言に非ざるを知る。人格の同じからざる亦此に律すべく、個人を以て言へば、自ら差別の顯然たるあり、殊に或特別の地位に居る者に在りては、較著なる差を表し、爲に英雄なる者躍如として顯現し、赫々として人目に映じ來るも、而も其の常人と相距る僅かに一尺の差のみ、決して尋丈の大差あるに非ざるなり。

人格に幾許か異同ありて社會に有する估價の區々なるは金銀銅鐵に彷彿たるものあり。均しく鑛物なれども、金最も貴重せられ、他は此と比して遞次相下降す。人の世に在るも亦此の類なり。金の世に貴重せらるゝは、其の世間に顯れ汎く市場に流通するに因るも、もと金の世界に存するは單に今の人間に貴重せられ、貯藏せらるゝ所に限らず、深

く土中に埋沒して未だ顯出せざるもの亦其の幾何なるを知るべからず。地球の中部は金若しくは更に有價なる鑛屬を以て成るとは既に確然として疑を容るべからざる所。而も其の金として貴重せられ居るは即ち人目に觸るゝが故にして、其の人目に觸るゝは地上に顯出し易き所に存したるに依る。若し鑛物中估價最も高きを以て金と爲し、而して金を以て獨り世に採掘せられたる所のみとする者あらば則ち妄なり。庭園の矮松微しく人工を加ふれば、則ち觀る者稱美して已まず。而して參天の巨松、根蹲虎の如く幹騰龍に似、大枝は蜿蜒として卑く低れ高く揚り、小枝は參錯して輪の如く蓋の若くなりとも、絶崖に懸り谿谷に匿れなば誰か之を知り誰か之を稱せんや。則ち湮沒して遂に見はるゝ期無かるべきなり。故に其の人目に觸れ衆客に稱揚せらるゝには、必ずや運搬に便にして移植に易かるべき地に在る者ならざるべからず。此と均しく英雄亦自ら眞價と市價との別の存するあるなり。

凡そ人の估價の異なるは一は天稟に於てし、又一は養成に於てす。即ち人生れながらにして腕力衆に超ゆる者あり、脚力群を拔く者あり。生れて纖弱なるも、頻に木棍を試揮して遂に強腕と爲るものあり、生れて軟弱なるも頻に山川を跋涉して竟に健脚と爲る者あり。稟質聰慧才力殊絶なる者あり、又養ひて大いに其の能を發する者あり。殊異差

別の存する、斯の如く、而して孰れか一能に秀づるあれば以て雄と稱するに足るが如し。唯雄者の浮沈の因りて決する所專ら其の資質の時と場所とに適合するとせざるとに在り。たとひ資質大いに優秀ならずとも能く其の時と場所とに適合するを得ば、其の人や直に雄を以て目せられ、或は絶群の軼才を具へ、能力の甚だしく發達するありとも、苟も其の時と場所とに適合するを得ずんば終生聞ゆる無くして身を沒せん。強腕を以て脚夫と爲り健脚を以て鍛工と爲る、皆凡々たるべきのみ。特技殊能も有れども無きが如けん。古來英雄として世に知られたる者亦偶〻時と場所とに適合するを得て以て大いに技能を伸べたるに外ならず。能力に勝るも其の出づる其の時にあらず、其の動く其の場所にあらずして湮沒して少しも聞ゆる無かりし者亦多からん。戰場に偉勳を樹てゝ雄名一時に轟ける者古來其の人衆し。而も之をして治平の際に生れ、其の勇力を用ふるに地無からしめば、其の如何か身を沒せる、未だ知るべからざるなり。偃武の代、泰平の宰相として功業一世を蓋へる者何ぞ限らん。而も之をして戰亂紛起し騷擾息む無き世に生れしめば、僅かに一刀筆吏たるに過ぎざるやも亦未だ知るべからざるなり。

但同等の能力を有する者克く其の能力を適合せしむる方を知り、知りて更に之が方を實行し得るあれば、それだけ多

能なりと觀るべきのみ。是それだけ己の力に役せられずして却て能く其の力を役するに堪へたる者と謂ふべきなり。夫の腕力、剛強なる者にして鍛工と爲り、脚力健強なる者にして脚夫と爲る、是洵に能く適合する所を得たる者にして、適合する所を曉りて更に力を揮ぶるを得ば、無用に見ゆる者を以てして尙大いに爲すあるに足るなり。昔より力強く氣剛にして、能く馬上に鐵棍を揮ふを以て英雄と爲れるあり。能く強弩を彎き百步に鐵甲を穿ちて以て英雄と爲れるあり。或は將を斬り旗を奪ふを以て英雄と稱せられ、或は力を角し他を蹶倒して英雄と稱せらる。此等の輩皆自ら求めて其の時と場所とを得たりとすべからざれど、其の適合する所を得て各力を揮べしは即ち一なり。實に適合する所を得ば、如何なる者も英雄と爲るべし。社會の事情は國に依りて變じ時に依りて異なり。もと萬國一揆百代一樣なるは嘗てこれ有らず。故に賤陋卑屈乞丐と異ならざる輩と雖も、若し卑陋風を爲し乞丐と相距る一步ならざる社會に立たば、或は以て大いに爲すあるに足るべく、暴戾獰悍盜賊と伍すべき徒と雖も、若し四圍の人獷悍俗を爲し盜賊と擇ぶ無き時代に在らば、また優に爲すあるに足るべし。是を以て衰亂の際朝綱紐を解くに當り、廟堂に立ちて權力を掌握せる者は概ね奸物に非ざるは莫し。而して淸廉公直己を修むる君子は屏息して顯はれざるな

闘茸 駑鈍にして才能なきもの。闘茸尊顯兮讒映得志。賈誼。

り。暴主上に在りて虐政を施すに當り、宮中に重用せられて權勢一時を壓する徒は阿諛佞黠、士君子の齒するを愧づる所多きに居り。此に於て俳優より出でゝ遂に一國の施政に參與する者あり。人の世に處する遭遇の變も亦多樣なりと謂ふべし。只其の時を得ば闘茸の器を以て大いに爲すあるに足り、其の時に適はざれば輔國の高材も終に何の爲す所無し。畢竟するに能く其の場所に適合するとせざるとに因りて其の人の估價茲に定まるなり。然れども市場の估價や時に亂高下あり、平時一金にだに値せざる兎も尚時に千金の巨價を博すること無しとせず。英雄も亦此と同じ。生ける時英雄として稱せられ、死後猶其の名を

傳ふる者にして、實は纖毫の斯の名に副へるあらず、全く一金にだに値せざる身を以て妄に千金の名を博せる者亦尠少に非ざるべきなり。

一九　英雄論　その二

三宅雪嶺

物必ず若干の眞價の在るあり。市場の估價は如何に亂高下の現るとも一金の價無き者は常に千金なるを期すべからず、能く千金を價する者は又自ら眞價の沒すべからざるありて存す。然らば謂ふ所の眞價とは果して如何なる所に於て此を見るべきか。人苟も一能に達し一技に秀づるあらば則ち以て雄とするに足るべきも、其の能を據べ技を

演ずるや互に長短廣狹の異なるあり、若し其の據ぶる所幅に於て廣く、長さに於て長きを得ば、其の人や事業の面積に於て偉大なりとすべし。一時に赫々たるも其の死するや直ちに滅盡する者あり、當代に照耀し、死後更に餘光を放つ者あり、或は生時甚だ顯れず、身を沒せる後に至りて愈〻光輝を加へ感化を及ぼすこと層一層廣きもの無きに非ず。是皆面積の異なる者なり。昔より一時代を限りて勢力頗る洪大に十分に其の手腕を據べ得たる人にして、他の時代に至り倏然迹を收めて終に顯はれざる者あり。墓木既に拱せる後聲名隆々たる者にして、却て其の生時を顧みれば、曾て力を據べ得ざりし者あるは、是一に其の力の適合する度

如何によりて別るゝなり。即ち或一時代にのみ適合する者は其の時代にのみ赫々たるなり。死後更に適合するある者は身を歿せし後に至るも尚照耀するなり。生時適合する所を得ずして死後始めて適合するを得たる者は、則ち世を去る後に及びて隆々たるなり。故に英雄の力を量りて其の大小を判せんと欲せば、其の面積の長短廣狹に準據して測るを最も良しと爲すなり。

然れども其の面積の長短廣狹亦境遇の順逆如何に從ひて自ら變異無きを得ず。其の力特に偉大なるに非ざるも、躬順境に在るが故に能く一時に雄揚せる者あれば、絕代の奇才を抱き雄略宏圖を蘊みて大いに當世に施す所あらんと

せしも、逆境に處し累次艱難に逢着せるの故を以て、事常に意の若くならざる者あり。才力倫に超え、其の出づる亦時と場所とに適合すべきを知るも、我此を爲さゞるも人能く此を爲すべく、且我此を爲すの適、以て他の爲さんとする者の妨阻と爲るべきを思惟し、仍つて無爲にして全く顯れざる者あり。斯の如く其の人物の性能を比し、境遇を察すれば、眞成の才力は彼此互に優劣を見ざるあり。或は顯れざる者の却て偉大なるあり。其の大小優劣の判るゝ所、以て比見して察知するを得べしと雖も、而も其の眞價の定まるは、其の人の性格其の時と場所とより一層進歩せる時と場所とに於て、猶能く其の力を攄ぶるに堪ふると否とに在り。

縱令其の爲す所は極めて微少なりとも、將全く爲す所あらずとも、苟も其の人にして世道人心を進むるに於て害無しとせば、害無きだけ以て勝れりとすべく、若し益する所ありとせば益するだけ更に勝れりとすべく、又進みて爲す所ありとせば、則ち猶更に勝れりとすべきなり。而して最も超勝せるは其の人にして能く力を生時に攄ぶるを得、其の時代をして一層高上の發達を遂げしめ、然る後永く感化を後世に及すより超勝せるはあらざるべきなり、固より天稟の才力を有し加ふるに其の才力を啓發することを得て、更に其の才力を適合せしむる途を發見し、生時能く衆生を救濟して一代を裨補し、而して身を沒せる後尙世を益するを

得ば、其の人や洵に出類超倫以て英雄中の最も英雄たる者と稱すべきも、是又其の人の境遇の如何によりて大差無きを得ざるなり。但通常稱して以て英雄と爲す所の者は斯の如きを以て最上と爲し、此より以下行動の面積の小なるに準じて遞次劣下する者とするなり。

世の以て英雄と稱する者、概觀すれば則ち前述の若し。然れども人間に通用する金も地中に埋沒する金も、もと一樣の金のみ、其の金たるに於て軒輊あるに非ざるなり。參天の質あれども人目に觸れざるを以て遂に顯るゝ期無かりし夫の谿谷の巨松の如き者もあるなり。軼倫の秀材は常價を以て評すべからざる者と謂ふべし。乃ち普通の相場に準じて估價を定むべき者も以て英雄とすべく、常價を以て評すべからざる者も亦英雄とすべし。世の所謂英雄は概するに此の間に列せん。（明治大正名家文）

山路愛山 名は彌吉。評論家。大正六年歿す年五十四。

二〇 旅行

山路愛山

風水相擊ちて波を爲す。孤掌の鳴らし難きが如く、感興は書齋の閑居に生ずるものに非ず。我をして自ら進んで自然の中に住せしめよ、自然も亦旋りて我の中に住むべきなり。我動けば自然も亦動く。我の中に在る天才は自然の光景に觸れて、始めて感興涌出す。昔は一室に坐して秋風白河の關を詠じたる人もあり、坐ながらにして名所を知れ

白河の關 都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關。能因法師。

る歌人もありき。而も是自然の神髄に達すべき道には非ず。自然は唯質問を發するものにのみ答辯を與へ、來りて見るものにのみ教訓を與ふるものなり。

試に千山萬水を跋渉し、而して後首を回らして故郷を見よ。如何なる感情の此の間に生ずべきか。幼時より爛熟したる某山某水は始めて遙かなる天に輝ける星の下の物となるに非ずや。心なくして飛ぶ雲も夕日も波濤も人をして故郷を聯想せしむる媒介となるに非ずや。無趣味なる青空も故郷の方の天とし云へば大いに詩趣を生ずるに非ずや。人は自ら廻轉して自然も亦其の態を變ず。昨日天邊の寸碧は今朝杖底の千岩なり。今朝杖底の千岩は即ち明日亦天邊の寸碧なり。甕中に在る者は甕の大小を知らず。身を轉じて甕外に在り、始めて甕の全形を知る。故郷とは何ぞや。現在の自己より過去の自己を眺むる感興なり。

我は嘗て蜻蛉を釣らんとして野外に遊びたる小兒なりき、溪流に網を投じて魚を捕へたる頑童なりき。其の岸に垂れたる楊柳、其の野に咲きたる杜鵑花、我は毫も其の奇なるを感ぜざりき。然れども我は故郷を去りて天涯の遊子となれり。位置と境遇とを異にせる我は始めて過去の位置と境遇とに在りし我を客觀的に見ることを得たり。而して嘗て我を圍みて而も我に感興を與へざりし自然は、始めて我をして涙を零さしむるものとなれり。是旅行が吾人

放翁　宋の陸游。詩人。

に與ふる詩趣の中に於て最も味あるものに非ずや。

舟に棹さして長き川を下れば、四山の面目畫屏の如く、時若し夏の初ならば、さつき霧島紅の雨を降らし、時もし秋ならば、兩岸の蘆荻風に鳴る。時々刻々に變化する光景人をして知らず覺えず自然の吸引する所たらしむ。若しくは放翁の歌へる如く「山重水複疑無路、柳暗花明又一村」前面に欝欝たる山あり、舵手棹を暗中に揮ふ、前途既に窮するが如し、忽ちにして山廻り、天濶く、雞犬聲あり、田畝開け、桃源一村人をして世界の霽明を歌はしむるものあり。此の時此の情果して如何ぞや。或は天寒くして毛氈に身を包み、柔櫓の聲に眠を催しながら覺むるが如く眠るが如く、有るが如く

夏草や芭蕉翁の句。

無きが如き間に於て、須臾に變じ行く兩岸のパノラマを樂しむが如き、如何に沒風流の徒と雖も終に黃金以外眞の娛樂あることを知るに至るべきなり。

朝まだき旅立すれば、駒の歩に連れて茅屋の軒も動き、絲の如くなる炊煙後に靉き、清爽の氣身を襲ひ、殘月彼方の山の端にかゝり、村里は靄の中に在りて覺めず、歩々光と暗とが地歩を爭ふが如き、又微雨の蕭々たるに歴史ある古寺を訪へば、蝸牛壁に紋を畫きて自ら多年風雨の侵蝕せるを示したる、若しくは夕陽に馬を下りて古英雄の廟を吊へば、

夏草やつはものどもの夢のあと。

何とも名狀すべからざる幽懷を生ずるが如き、是皆旅行に

羽蟻　與謝蕪村の句。

非ずんば得べからざるものにあらずや。

羽蟻飛ぶや、富士の裾野の小家より。

一面の平湖鏡の如き浮島ヶ原、其の南を縫へる松林の東海道、總て是一幅の畫圖なり。春天穩かにして、富士亂到らず、空氣は漣波だになき水に似たり。忽ち見る羽蟻の飛ぶを。靜中纔かに動あり、駘蕩の春色寫し得て眞に迫る。此豈一室に坐して冥想する者の解し得る所ならんや。

旅行の妙趣は登臨を以て最も大なりとす。青竹を杖づきて五千尺以上の高山に上り、而して下界を見よ。數個の山脈は蛇の如く邑を圍み、州を隔てゝ營々たる人間恰も蟻蛭の如くに見ゆるのみならず、造化の大經濟も亦雙眸の外に漏れず、山河の配置自ら天命を示せり。乾坤大なりと雖も悟了すれば、浮動の原素に過ぎず。アトムとアトムと相擊ち相觸れ、紛糾錯綜したる混沌の狀態たるに過ぎず。劉は起りたり、項は亡びたり、シーザーは生れて死したり、帝國も覇圖も俯視すれば唯一氣のみ。東坡の「山川與城郭漠々同一形。市人與鵶鵲浩々同一聲」と歌へるは眞なり。故に山に上るは一の哲學なり、高山の絶頂に坐するものは即ち哲學の講壇に坐する者なり。

人は永久無限を慕ふ者なり。人の此の世に於ける境界は有限なり。而れども彼は無限の中に姙まれたる者なるが故に、無限は其の欲望なり。雲霓よりも高き峠に息らひて

身を雲の中の人となし、世界の彼方より此方に旅行する鳥の行方を眺むれば、無限の渴望を慰せらるゝことなきを得ず。白雲のたなびく山のあなたにも國あり、遙かなる嶺の外にも鳥の住むべき里あり。

天つ空
源頼政の歌。

天つ雲ひとつに見ゆるこしの海の
浪をわけてもかへるかりがね。

天青くして雨は雁の背より霽れたり。自然の家には住むべき舍多きかな。人間豈塵界の爲に繩せらるべけんや。此の意義に於て自然は人をして無限ならしむるものなり。是旅行より學び得たる自然の教訓に非ずや。（愛山文集）

上田敏
英文學者。文學博士。京都帝國大學文科大學教授。大正五年卒す年四十二。

二一　汽車に乘りて

上田　敏

赤松の林をあとに、　廐畠ひだりに見つゝ、
汽車はいま堤にかゝる。

ほのかなる水のにほひに、　河淀の近きはしるし。
三稜草生ふる河原に、　葦切はけゝしと噪ぎ、
鵠こそ夏は來られ、　たま〳〵に百舌の速贄、
篦鷺は何をか思ふ、　しよんぼりと畷に立てり。

紡績の宿にやあらん、　きり、はたり、はたり、ちよう〳〵、
杼の音へだたりゆけば、　道祖神まつるあたりか、

鐵道の蹈切近く、　繩帶の襤褸のころも、
かち色は飾磨の染か、　乳呑子を負へる少女は、
淺茅生の末黑に立ちて、　「萬歲」と囃し送りぬ。

萬歲はなれにこそあれ、　幾年を生きよ、里の子。
人の世に尊きものは、　土の香よ、國の御魂よ。
僞の市にすまへば、　產土の神にさかりて、
養をかきたる人も、　埴安の鄕のつちより、
生えぬきのなれに呼ばれて、　本然の命にかへる。

道芝の上吹く風よ、　農人の寢覺に通ふ、

蘇門答刺の香　六國香の一。スマタラ島より出づる香木。
瀧澤馬琴　小說家。名は解。曲亭馬琴と號す。嘉永元年(一八四八)歿す年八十一。
禍福は糾ふ纆　禍之與福合糾合而異糾纆。漢書。
人間萬事　人間萬事塞翁馬　世沈軒中雙眼花　元信
禍は福の倚る所　禍兮福之所倚、福兮禍之所伏。老子。

微かなる土のおとづれ、　なつかしき母の聲あり。
畫さがり草の香高く、　松脂のにほひまじりて、
地の胸の乳房に溢る。　蘇門答刺の香も及ばじ。

忽ちに鐵のにほひす、　鳴神の落ちかゝるごと、
汽車はいま橋に轟く。　桁構眼路をかぎりて、
ひとり見る蛇籠の礫。（あやめ草）

二二　芳流閣上の奮鬪

瀧澤馬琴

古の人謂はずや、「禍福は糾ふ纆の如し。」人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。そは福の倚る所、將禍の伏す所、

犬塚信乃　八犬士の一。名は孝。孝の字の玉を有す。

古河　下總國結城郡古河町。古河公方足利成氏の居りし處。

村雨　信乃の父犬塚番作が成氏の兄春王より預りたる名刀。信乃の知らぬ間に惡漢にすりかへられたるなり。

犬飼見八　八犬士の一。信の字の玉を有す。

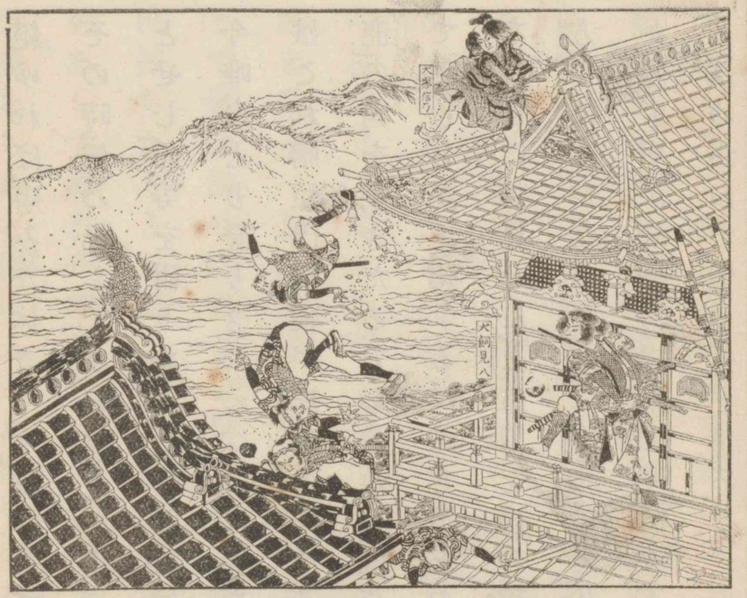
彼にあれば此にありとは思へども、豫てより誰かよくその極を知らん。憐むべし、犬塚信乃は親の遺言記念の名刀、心にしめつ身につけつ、艱苦の中に年を經て、得難き時を得てしかば、はる〳〵古河へ齎して、名を揚げ、家を興すべかりしその福は禍とふりかはりたる村雨の刀は舊の物ならで、わが身を劈く讐とぞなりし。憾をこゝに釋く由もなく、事急にして意外にあり。纔かに當座の辱を避けばやと思ふばかりに、夥多の圍を切開きて、芳流閣の屋の上に登れども、とにかくに脱れ去るべき道のなければ、其處に必死を窮めたる心の中はいかなりけん。想ひやるだにいと痛まし。されば又犬飼見八信道は犯せる罪のあらずして月來獄舍に繫れし禍は今恩赦の福。我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役義。犬塚信乃を搦めよとて愁に擇み出されつ、他の憂を身の面目に今更用ひられんこと願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ君命重く、彌高き彼の樓閣は三層なり。その二層なる檐の上まで身を霞ませて登りて見れば、足下遠く、雲近く、照る日烈しく堪へがたき、時は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の餘熱をわたる敷瓦は凸凹隙なく波に似て、下には大河滔々たるこゝ生死の海に入る流は名に負ふ坂東太郎、水際の小舟楫を絶え、進退既に谷りし敵にしあれば、いかでわれつなぎとめんと鼈の樹傳ふ如くさら〳〵と登りはてたる三層の屋根にはまぶしさ

成氏朝臣 古河公方足利成氏。
横堀史在村 成氏の老臣。
墨氏 墨翟。周代の人。宋に仕ふ。
魯般 公輸般。周代の人。楚に仕ふ。

す由もなく、かたみに隙を窺ひつゝ、瞰まへあうて立つたる有様、浮圖の上なる鶴の巣を巨蛇の狙ふに似たりけり。廣庭には成氏朝臣横堀史在村等の老黨・若黨圍繞せし床几に尻を打掛けて、勝負いかにと見上げたり。亦只閣の東西には、腹卷したる許多の士卒、鎗・長刀を晃かし、或は箭を負ひ、弓杖突立て、組んで落ちなば擊ちとめんとて、項を反らして之を觀る。加之外のかなたは、綿連として杳かなる河水遶りて砌を浸せば、たとひ信乃武事長け、膂力衰へず、よく見八に捷ちたりとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず、魯般が雲梯なければ、地上に下るべくもあらず。渠、鳥ならねど、羅に入りぬ、獸ならねど、狩場に在り。三寸息

膳臣巴提便 欽明天皇七年百濟に使せしとき虎穴に入りて虎を刺殺す。
富田三郎 和田義盛の士、源實朝の面前にて長三尺方七寸の大鹿角二箇を一度に折る。

絶ゆれば、事みな休まん。脱れ果てじ。と見えたりけり。その時、信乃思ふやう、「初層・二層の屋の上まで追ひのぼらんとせし兵等を斫りおとしつる後は絶えて近づく者なきに、今唯ひとり登りきぬるはよに覺ある力士ならん。しやつはこれ膳臣巴提便が虎を暴にする勇あるか、又富田三郎が鹿の角を裂きたる力あるか。遮莫一個の敵なり、ひつ組んで刺しちがへ、死するに難きことやはある。よき敵ござんなれ、目に物見せん。」と血刀を袴の稜もて推拭ひ、高瀨の如き方桴に立つたるまゝに寄するを俟てば、見八も亦思ふやう「かの犬塚が武藝勇悍素より萬夫不當の敵なり。さりとても搦めかねて他の援を借ることあらば、獄舍の中よりこの



芳流閣上の奮闘（南總里見八犬傳）

役義に擇み出されしかひもなし。からめとるとも、撃たるとも、勝負を一時に決せんものを」と思ひにければちつとも擬議せず、「御諚ざふ」と呼びかけて、持つたる十手をひらめかし、飛ぶが如くに方桁の左の方より進み登りて、組まんと

すれど、寄せ附けず。心得たりと鋭き太刀風に撃つをはつしと受留めて、拂へば透かさずこむ刀尖をさゝへて流す一上一下、辷る甍を蹈みとめてしきりに進む捕手の祕術、あなたもおとらぬ手練の働、嵩より落す太刀筋をあちこち外す虚々實々未だ勝負を判かざれば、廣庭なる主從・士卒は手に汗握らざるもなく、またゝきもせず氣を籠めて見るめもいとゞはるかなり。

さる程に、犬塚信乃は侮り難き見八が武藝に、敵を得たりけりと思へば、勇氣いやまして刀尖より火出づるまで寄せてはは返す太刀音、かけ聲、兩虎深山に挑むとき、錚然として風起り、二龍青潭に戰ふ時、沛然として雲起るもかくぞあるべき。

春ならば峯の霞か、夏ならは夕の虹かと見るばかりなるいと高き閣の棟のうへに死を爭ひし爲體、よに未曾有の晴業なれば、見八が被籠の鎖、肱當の端を裏かくまでに切裂かれしかど、太刀を拔かず。信乃は刀の刃も續かで、初に淺痍を負ひしより次第に疼みを覺ゆれども、足場を守りて撓まず、去らず、疊みかけて擊つ太刀を見八右手に受流して、かへす拳につけ入りつゝ、やつとかけたる聲と共に眉間を望みて礑と打つ十手を丁と受けとむる信乃が刃は鍔際より折れて遙かに飛びうせつ。見八得たりとむずと組むを、そがまま左手に引着けてかたみに利腕しかととり、捩ぢ倒さんとえいごゑあはして揉みつ揉まるゝ力足、これかれ齊しく蹈辷らして河邊の方へころ〳〵と身をころばしゝ覆車の米苞坂より落すに異ならず。勾配けはしき棧閣に削りなしたる甍の勢、とゞまるべくもあらざめれど、かたみにとつたる掌を緩めず、幾十尋なる屋の上より末遙かなる河水の底には入らで、程もよし、水際に繫げる小舟の中へうちかさなりつゝどうと落つれば、傾く舷へと立つ浪にざんぶと音す水煙、纜ちようと張りきつて射る矢の如き早川の直中へ吐出されつ。しかも追風と退く潮に誘ふ水なる下り舟、往方も知らずなりにけり。（南總里見八犬傳）

二三　松の下露

さる程に後醍醐天皇元弘元年九月十三日。

十善 不殺生 不偸盜 不邪婬 不妄語 不兩舌 不惡口 不綺語 不慳貪 不瞋恚 不邪見

赤坂 河内國南河内郡赤坂村大字水分に城址あり。

さる程に、類火東西より吹かれて餘煙皇居にかゝりければ、主上を始め參らせて、宮々卿相雲客みな徒跣なる體にて、何處を指すともなく、足に任せて落ち行きたまふ。此の人々、始め一二町が程こそ主上を扶け參らせて前後に御供をも申されたりけれ、雨風烈しく道暗うして、敵の鬨の聲こゝかしこに聞えければ、次第にわかれ〳〵になりて、後には只藤房・季房二人より外は主上の御手を引き參らする人もなし。忝くも十善の天子、玉體を田夫・野人の形に變へさせたまひてゞそことも知らず迷ひいでさせたまひける御有樣こそあさましけれ。いかにもして夜の中に赤坂の城へと御心ばかりを盡されけれども、假にも未だ習はせたまはぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心ちして、一足には休み、二足には立止り、晝は道の傍なる青塚の陰に御身を隱させたまひて寒草のおろそかなるを御座の褥とし、夜は人も通はぬ野原の露分け迷はせたまひて羅穀の御袖をほしあへず。とかうして夜晝三日に山城の多賀郷なる有王山の麓まで落ちさせたまひけり。

有王山 山城國綴喜郡にあり。

藤房も季房も三日まで口中の食を斷ちければ、足たゆみ身疲れて、今はいかなるめにあふとも逃れぬべき心ちせざりければせん方なくて幽谷の岩を枕にて、君臣兄弟諸共に現の夢に臥したまふ。梢を拂ふ松の風を雨の降るかと聞召されて木のかげに立寄らせたまひたれば、下露のはら〳〵

と御袖にかゝりけるを主上御覽ぜられて、

さして行く笠置の山を出でしより
あめが下には隱れがもなし。

藤房卿涙を抑へて、

いかにせん、賴むかげとて立寄れば、
なほ袖ぬらす松のしたつゆ。

山城の國の住人深須入道・松井藏人二人、此の邊の案內者なりければ、山々峯々殘る所なく搜しける間、皇居隱れなく尋ねいだされたまふ。主上誠におそろしげなる御氣色にて、「汝ら心あるものならば、天恩を戴いて私の榮華を期せよ。」と仰せられければ、さしもの深須入道俄に心變じて、「あはれ此の君を隱し奉つて義兵を擧げばや。」と思ひけれども、あとに續ける松井が所存知り難かりける間、事の漏れ易くして道の成り難からん事をはかりてもだしけるこそうたてけれ。俄の事にて綱代の輿だになければ、張輿の怪しげなるに扶け載せ參らせてまづ南都の內山へ入れ奉る。其の體、只殷湯、夏臺に囚はれ、越王、會稽に降ぜし昔の夢に異ならず。之を見る人ごとに、袖をぬらさずといふことなかりけり。

十月二日、六波羅の北方常葉駿河守範貞二千餘騎にて路を警固仕りて主上を宇治の平等院へ成し奉る。其の日關東の兩大將、京に入らずしてすぐに宇治へ參り向うて龍顏に謁し奉り、まづ三種の神器を渡したまはつて持明院新帝へ

內山　大和國山邊郡朝和村柚之內永久寺。
殷湯　夏の桀王湯を夏臺に囚ふ。夏臺は夏の代の獄の名。
越王　越王句踐吳王夫差に破られ會稽山にて降る。
兩大將　大佛貞金。金澤貞將。
持明院新帝　光嚴天皇。

内侍所八咫鏡。

參らすべき由を奏聞す。主上藤房を以て仰せ出されけるは、「三種の神器は古より繼體の君、位を天に受けさせ給ふ時自らこれを授け奉るものなり。四海に威を振ふ逆臣あつて暫く天下を掌に握るものありといへども、未だその三種の重器を自ら擅にして新帝に渡し奉る例を聞かず。その上、内侍所をば笠置の本堂に捨て置き奉りしかば、定めて戰場の灰塵にこそ落ちさせ給ひぬらめ。神璽は山中に迷ひし時、木の枝に懸け置きしかば、遂にはよも吾が國の守とならせたまはぬことあらじ。寶劍は武家の輩もし天罰を顧みずして玉體に近づき奉ることあらば、自らその刃の上に伏させたまはんずるために、暫くも御身を放たるゝことあるまじきなり」と仰せられければ、東使兩人も六波羅も辭なくして退出す。

翌日龍駕を廻らして六波羅へ成し參らせんとしけるを、前前臨幸の儀式ならでは還幸なるまじき由を強ひて仰出されける間、力なく鳳輦を用意し、袞衣を調進しける間、三日まで平等院に逗留あつてぞ六波羅へは入らせたまひける。

日來の行幸に事かはりて鳳輦は數萬の武士に打圍まれ、月卿雲客はあやしげなる籠輿・傳馬に扶け載せられて、七條を東へ、河原を上りに、六波羅へと急がせたまへば、見る人涙を流し、聞く人心を傷ましむ。悲しいかな、昨日は紫宸、北極の高きに坐して百司禮儀の裝をつくろひしに、今は白屋、東夷

天上の五衰 諸天命欲レ終時五死相現。一華冠萎。二腋下汗出。三塵來著レ身。四見三更有レ天坐ニシテ坐處一。五自不レ樂二本座一。

人間の一炊 邯鄲の邸舍にて黄粱を炊ぐ間に盧生が見たる富貴五十年の夢。

中宮 藤原禧子。太政大臣藤原實兼の女。

の卑しきに下らせたまひて萬卒守禦の嚴しきに御心を惱まさる。時移り事去り、樂盡きて哀來る、天上の五衰、人間の一炊、たゞ夢かとのみぞ覺えたる。遠からぬ雲の上の御住居、いつしか思しめし出す御事多きをりふし、時雨の雨一通り軒端の月に過ぎけるを聞召して、

住みなれぬ板屋の軒のむらしぐれ、
　音をきくにも袖はぬれけり。

四五日ありて中宮の御方より御琵琶を遣はさるゝに、御文あり。御覽ずれば、

思ひやれ、塵のみつもる四つの緒に
　はらひもあへずかゝる涙を。

引返して御返事ありけるに、

涙ゆゑ半ばの月はくもるとも、
　ともにみし夜の影は忘れじ。（太平記）

二四　橋辨慶

前ジテ辨慶　後ジテ同　トモ　從者　子方　源牛若　處　京都　時　六月

西塔　比叡山の西塔。

五條の天神　京の五條の通にあり。

シテ詞「是は西塔のかたはらに住む武藏坊辨慶にて候。我宿願の仔細有つて、五條の天神へ、丑の時まうでを仕候。今日滿參にて候程に、唯今參らばやと存候。如何に誰かある。」

トモ詞「御前に候。」

シテ「五條の天神へ參らうずるにてあるぞ。其の分心得候へ。」

トモ「畏まつて候。又申すべき事の候、昨日五條の橋を通り候處に十二三ばかりなる幼きもの小太刀

にて切つて廻り候は、さながら蝶鳥のごとくなる由申候。まづ〳〵今夜の御物詣は、思召し御止りあれかしと存候。

シテ「言語道斷のことを申すものかな。たとへば天魔鬼神なりとも、大勢にはかなふまじ。おつ取りこめて討たざらん」。

トモ「おつ取りこむれば不思議にはづれ、敵を手元に寄せ付けず」。シテ「手近く寄れば、トモ「目にも」、シテ「見えず」。地「神變奇特不思議なる化生のものに寄せ合せ、かしこう御身討たすらん。都廣しと申せども、是程の者あらじ。げに奇特なる者かな」。

シテ「さあらば今夜は思ひ止まらうずるにて有るぞ。いや、辨慶ほどの者の聞逃げは無念なり。今夜夜更けば、橋に行き、化生の者を平らげんと」、地「ゆふべ程なく暮方の雲の氣色も引きかへて、風すさまじく更くる夜を、遲しとこそは待居たれ」。

牛若「さても牛若は母の仰の重ければ明けなば寺へ上るべし。今宵ばかりの名殘なれば、五條の橋に立出でて、川波添へてたちまちに、月の光を待つべしと」、一聲「ゆふ波の氣色はそれか、夜嵐の夕べ程なき秋の風」。地「面白の氣色やな、そゝろ浮立つ我が心。波も玉散る白露の夕顏の花の色、五條の橋の橋板をとゝろ〳〵と踏みならし、音も靜かに更くる夜に、通る人をぞ待居たる」。

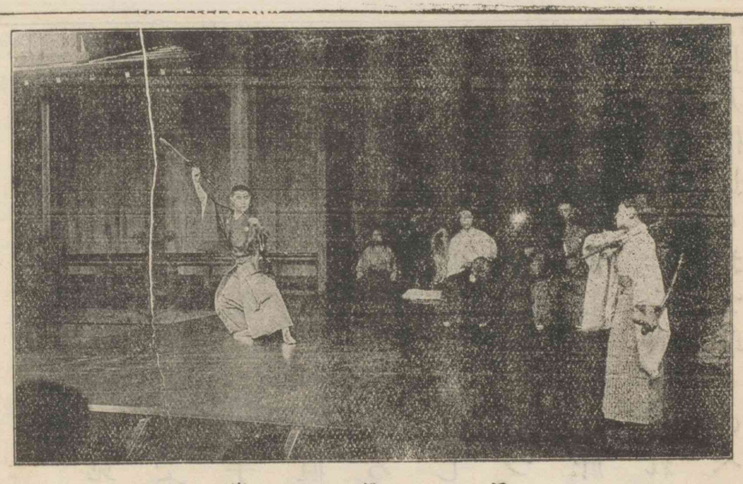
レチ「既に此の夜も明方の、山塔の鐘もすぎまの雲の光かゝ

やく月の夜に、着たる鎧は黑革のをどしにをどせる大鎧、草摺長に着なしつゝ、素より好む大長刀、眞中取つて打ちかづき、ゆらり〳〵と出でたる有樣、如何なる天魔鬼神なりとも面を向くべきやうあらじと、我が身ながらも物賴もしうて、手に立つ敵のこひしさよ。

牛若「川風もはや更け過ぐる橋の面に、通る人もなきぞとて、心すごげに休らへば、」シテ「辨慶かくとも白波のたち寄り渡る橋板をさもあらゝかに踏みならせば、」牛若「牛若彼を見るよりも、すはや嬉しや、人來るぞと、薄衣猶も引きかづき、かたはらに寄りそひたゝずめば、」シテ「辨慶彼を見附けつゝ、言葉をかけんと思へども、見れば女の姿なり、我は出家の事なれば、

思ひ煩ひ過ぎて行く。

牛若「牛若かれをなぶつて見んと、行違ひざまに長刀の柄元をはつしと蹴上ぐれば、」シテ「すは痴者よ、物見せんと、」地「長刀やがて取直し、いで物見せん手並の程と、切つてかゝれば、牛若は少しも騷がずつゝ立ち直つて、薄衣引きのけつゝ、靜々と太刀拔放つて、つゝ支へたる長刀の切先に太刀打合せ、つめつ開いつ戰ひしが、何とかしたりけん、手元に牛若寄るとぞ見えしが、たゝみ重ねて打つ太刀に、さしもの辨慶合せ兼ねて、橋桁を二三間、しさつて肝をぞ消したりける。あら物々し、あれ程の小姓一人を切ればとて手並にいかで洩すべきと、長刀柄長くおつ取りのべて、走り懸つてちようと切れば背



けて右に飛びちがふ。取直して裾をなぎ拂へば、踊りあがつて足もためず、中を拂へば頭を地に付け、ちゞに戰ふ大長刀、打落されて力なく、組まんと寄れば切拂ふ、すがらんとするも便なし。せん方なくて辨慶は、希代なる少人かなとて、あきれはてゝぞ立つたりける。」

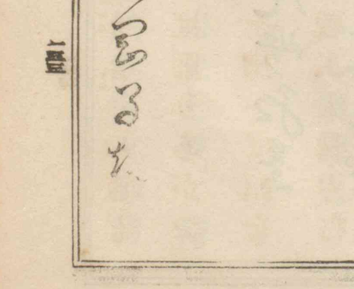
橋

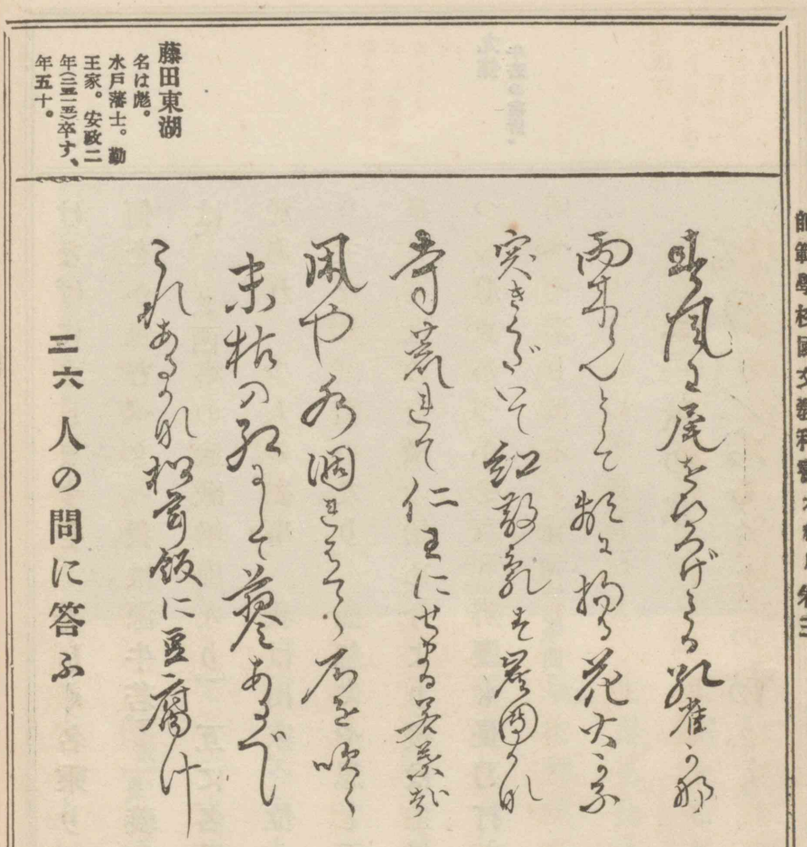
辨慶

ロンギ地「不思議や、御身たれなればまだいとけなき姿にて、かほどけなげにましますぞ。委しく名乘りおはしませ。」牛若「今は何をか包むべき。我は源牛若。」地「義朝の御子か。牛若「扨汝は。」地「西塔の武藏辨慶なり。」互に名乘合ひ、降參申さん、御免あれ。少人の御事。我は出家。位も氏もけなげさも、よき主なれば賴むなり。麁忽にや思し召すらん、さりながら、是又三世の奇緣の始め、今より後は主從ぞと、契約堅く申しつゝ、薄衣かづかせ奉り、辨慶も長刀打ちかついで、九條の御所へぞ參りける。（觀世流謠曲）

九條牛若の宿所。

二五　秋の水





尾崎紅葉
西園寺公望
佐々醒雪
高濱虛子
河東碧梧桐
坂本四方太

藤田東湖

二六　人の問に答ふ

藤田東湖
名は彪。水戸藩士。勤王家。安政二年(一八五五)卒す、年五十。

慎中
弘化四年より嘉永五年まで水戸に謹慎を命ぜらる。

弘道館
水戸藩の學校。天保十三年德川齊昭これを開く。

一兩年以來十數度の貴翰、尙又時々御惠投ものに預り、殊に當春梅花の御贈もの等、實以て御厚意淺からず。僕が頑鈍狂愚、何故、右樣御眷顧下され候や、謝する所を知らず、汗顏の至に御座候。

さて慎中は貴答延引も當然に候處、當二月幽厄を脫し候上は、早速一書を裁し、右數度の御厚意を謝し候筈の處、爾來僕が境界、實以て寸暇もこれなく、尤も日々夕刻大白を傾け候暇はこれあり候へども、其の外はとかく閑隙を得ず、今日始めて貴答に及び候。

一、先年弘道館にて貴兄御面貌はたしかに相覺え候。謂はゆる嶄然頭角、今以て心目に宛然に御座候處、追々御詩

文等拜見、尚又御噂承知致候へば近來益、御研精の由、憚ながら感心仕候。老人くさき申分には候へども、御國も學校御開き以來、讀書家は悉く澤山に相成候へども、眞實の學者は寥々に御座候間、國家のため御勵精尤に存候。僕などは罪名載せて幕府の籍にある身分にて、天地の一棄人に候間、理窟がましきことは一切申すまじと心がけ候へども、大義未だ曾て君臣を忘れざる至情もだし難く、且は度々の御細書、御深意をも

藤田東湖

弘道館記

德川齊昭の撰し且書せるもの。

推察致し、旁、心事ほゞ吐露仕候。

申すまではこれなく候へども、學問は實學にこれなくては、却て無學にも劣り申候。弘道館記中に「忠孝無二、文武不岐、學問事業、不殊其效。」と遊ばされ候儀、實に學者立志の模範、志士報國の根本に御座候はんか。今世、親孝行の樣なれども、御奉公は出來ぬ風の人も相見え、又御奉公出來候樣にても、父子の中とくと致さゞる向も相見え候。これら決して聖人の道にあらずと存候。又少々書を讀み候へば何か仔細らしき顏色を致し、言語等漢文交りにてしやらくさく候へども、劍槍等の藝一切出來申さず、文弱白面の書生と相成候儀、毛唐人ならばそれにて宜しきか

も相知らず候へども、かりそめにも神州尚武の域に生れ且は武家の飯を食ひ候者は、右様白面の書生は風上へも置きかね候事勿論に御座候。武人の愚にも困り候へども、どちらと申候へば、寧ろ文弱の書生にはまさり申すべきか。しかし成るべきだけは、文武岐れず兼備これありたき事、是亦勿論に御座候。

學問・事業その效を殊にせざるに至り候うては、なか〳〵難物なり。僕が輩頑白に相成候へども、今以て學問・事業一致の場合に相成申さず、及ばずながら心を用ひ居る事に候。修己治人の工夫、明倫正名の講究、時々刻々離れ申さず候はゞ貴兄などは妙齢の御事ゆゑ必ず學問・事業の

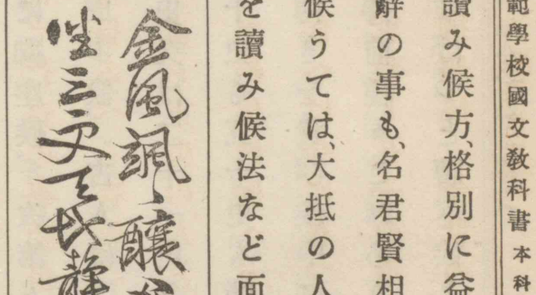
十七史 史記 前漢書 後漢書 三國志 晉書 宋書 南齊書 梁書 陳書 魏書 北齊書 周書 隋書 南史 北史 唐書 五代史 二十一史 十七史に宋史 遼史 金史 元史を加ふ。

一致も御出來なされ候はん。隨分御研精御尤に御座候。

一、讀書は博きを貴び候へども、うはすべりいたし候うては、何程萬卷を讀み候とても、用をなしかね候はんか。古人の謂はゆる「眼光紙背に透る」と申すごとく讀みたき事に御座候。次第々々に後の世に生れ候ほど、讀書多く相成申候。古人は六史か七史讀み候へば相濟み候が、十七史又は二十一史と申す様に相成、末が末に相成候はゞ、三十史も五十史も讀み申さず候うては相成らざる譯合故、博きを貴び候中にも、その要を得候儀肝要と存候。人の持前種々これあり候故、一概には申兼候へども、歴史等も唯ばつと讀み候よりは、何か一つ講究著述致す心得にて

東坡
某讀二漢書一、至レ是凡三經二手鈔一矣。初則一段事鈔二三字一爲レ題、次則兩字、今則一字。

讀み候方、格別に益を得候樣相覺え申候。制度の事も、文辭の事も、名君賢相の行狀其の外一々記憶致すべしと存候うては、大抵の人にては中々覺え兼申候。東坡が漢書を讀み候法など面白く御座候。尚又御勘考御尤に存候。



藤田東湖筆蹟

一、文章は末藝に候へども、自分にて文を書き候位にこれなく候うては、經書も歷史も本當に解し申されず候間、隨分御餘力には御修行御尤に存候。但し近來、長短句にてごまかし候詩流行致候處、唐詩選の序にも、李太白長語を

李太白長語
七言古詩惟子美不レ失二初唐氣格一、而縱橫有レ之、太白縱橫、往々彊弩之末、間雜二長語一、英雄欺レ人耳。

東夷の人
日本國夷人物茂卿拜手稽首敬題。贊孔子眞。

用ひ候事を評して、「英雄人を欺くのみ」と申候。今の流行は凡庸人を欺くとも申すべく候。右の類は先々御稽古これなき方と存候。

一、慶元以來、人物林の如く、豪傑も追々に出で候處、其の中にて、仁齋の學問、徂徠の文章、熊澤の經濟、新井の敏捷など、皆畏るべく存候。しかし右の內、徂徠は更に名分を存ぜず、自ら東夷の人と稱し候儀、不屈至極に御座候。新井も才氣絕倫に候へども、東都を張立て候志は惡むべく候。さ候へば、今に在つては右數子の長を取り、短を捨て、實學講究致し、孔子の遺意に叶ひ候樣、御同意企望致したき事に御座候。今世の儒者、やゝもすれば唐人の事は丁寧に

司馬溫公　北宋の司馬光、字は君實、諡して溫公といふ。
朱文公　南宋の朱熹、字は元晦、諡して文公といふ。
韓魏公　北宋の韓琦、字は稚圭、魏國公に封ぜらる。

申し、司馬溫公・朱文公・韓魏公などと稱へ、さて新田義貞が云々、楠木正成が云々など申候類甚だ相濟まず。右樣の人をば僕は、毎々和唐人と唱へ申候、御一笑下さるべく候。その外當世の學風其の弊少からず候へども、迚も書中に盡しかね候故、まづその一端を擧げ候のみに御座候。僕は最早貴地などへ出で候事は終身これなく候間、拜面もむづかしく候處、貴兄は御墓參御對面等にて御歸鄉も御自由ゆゑ、もし來春など一寸も御歸鄉に相成候はゞ種種存候だけの事は御切磋申すべく候。

先は今日は前文御申譯かたゞ〳〵一書を裁し候事に御座候。しかしながら、御覽の通り亂筆さぞ御讀みかねなされ候はんと閣筆致候。以上。

坪內逍遙　名は雄。英文學者。戲曲作家。文學博士。安政六年（一八五九）生。
長柄堤　攝津國西成郡豐崎村あたりの長柄川の堤。
茨木　攝津國三島郡茨木町。

二七　長柄堤の訣別　その一

坪內逍遙

糒を食ふことは難しと雖も、未だ如かず、生きて別るゝことの難かるには。苦きことは心肝にあり。晨雞再び鳴いて殘月薄く、征馬しきりに嘶いて行人出づ。はや分れゆく橫雲や、殘んの星を一つづつ鐘が消し行くいなのめの長柄堤に秋闌けて、一村蘆に風黑く、有明凄き大川水逝きて歸らぬ浪の音、狹霧に咽び白けゆく千草が蔭の蟲の聲、哀はいとゞまさるらん。片桐市正且元は居城茨木へ立退かんと、從ふ郎黨一百餘人、邸を立つて大阪城をあと

になし、列を正してしづ〳〵と長柄堤に差懸る。其の時市正手綱をひかへ、從兵を先へ進ませ、弟主膳正を呼び近づけ、あらためていひけるやう、

市「いかに弟、我昨日討手を待受け、自殺せんず覺悟なりしに伊豆守が殘兵ぬけがけなし、討手の荒膽を挫ぎしため、備ありと見違へしか、また寄せ來らん模樣もなく、剩へ夜に入りては、外に在りし家臣まで、變を聞きつけ馳せ集り、血氣のともがらこれに氣を得て、薪に油を濺げる如く、弓鐵砲とひしめき騷ぎ、命を聽かばこそ、打棄ておかば、珍事に及ばんも圖りがたく、暫く彼等をなだめん爲、一先茨木へ引退き後事を圖らんとはいひしものゝ、昨夜仄かに傳へ聞けば、織田入道も君を見限り、俄に京表へ退去の由、お家の危機いよ〳〵迫んぬ。今にも關東と隙を生じ、大事に到らんこと必定なり。それにつき所存あつて、先刻今村三右衞門を木村が邸へ走らせたり。追付け三右が吉左右あらん。我はこれにて相俟つべし。御身は暫く我に代り、手勢を差配し、途中に不慮の間違なきやう、一足先へ參らるべし。

と言葉のうちはるかにしたひ駈けくる足音。

主「あの足音は、たしかに今村。」　市「三右衞門か。」　今「我が君これに御座ありしか、長門さまには追付けこれへ。」　市「ほゝ太儀太儀、滿足なるぞよ。しからば主膳は一足先へ。三右衞門もこゝかまはず、我はこれにて相俟つべし。」　主「仰ではご

ざりますれど、油斷ならざる當節柄、如何なる變事あらんも知れず。」今「只御一人此のところに、御座あらんは心元なし。」主「せめて我々、」二人「兩人は、」市「はて入らぬ遠慮。氣づかひ致すな。往け〳〵。」主「ぢやと申して。」市「はて往けと申すに。」二人「はゝあ。」

顏見合せて是非なくも、主膳をさきに三右衞門、心殘して行き過ぐる。

後には何か一思案、寂然として駒立つる長柄堤の有明がた、塒に囀る小鳥の聲、川霧やう〳〵霽れゆけば、遠樹模糊として幹を分ち、ほの見え渡る賤が屋に一筋騰る朝煙、くたかけの聲勇ましく、生氣溢るゝ東の空には似ぬや入る

方の月すさまじき柳陰、枯葉枝まばらにして風飄々、見る目も昏し、をちかたにおぼろ〳〵とあらはるゝ名におほさかの四衢八街、悄然としてさびしげに一棟たかく聳えしは、

市「おゝ、あれこそはお天守ぢやなあ。南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと築かせられし大阪城、故殿下薨れさせたまひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ離れ、取りわけ加藤肥州逝去の後は、思慮ある者には堅節なく、義勇を存ずる者才略乏しく、阿附黨同して相鬩げば、大政所の御方さへ當家を餘所にみそなはし、浮世離れし御有樣。唇齒已に亡ぶ。今にもあれ事起らば、金城湯池も其の甲斐

千姫君　徳川秀忠の女。秀賴の室となる。

なく」

いひかけて聲曇らせ、

市「須彌より重き御遺命、夢聊かも忘れざれど、御運の末か、情なや、此の且元がする事爲す事いすかの嘴とくひちがひ、兩家を繫ぐ絆にもと迎へ奉りし千姫君は東西不和の導火となり、毘盧舍那佛の御胸にも大慈大悲は宿らざるか。「御家とこしなへに康かれ。」と祝ひし文字が本となり、降つて涌いたる難題は、只前門の虎にして、後に不慮の豺狼あり。かゝる仕儀となつたること御運の末といひながら、」

悚へず馬よりとびくだり、彼方に向ひ平伏なし

市「是しかしながら不肖且元、愚昧にして先見無く、姑息因循して大事を誤り、空しく關東の罠に罹り、仰せつけられし御遺命に背き奉る今日の仕合せ、不忠とも言ふ甲斐なしとも思召さん。それを思へば、且元が此の腸はちぎるゝばかり。償ひ難き不臣の罪はあの世で御詫仕らん。御赦しなされて下さりませ。」

在すが如く兩手をつき、人目なければ、やゝしばし不覺の涙に暮れけるが、やゝあつて心づき、

市「あゝ我ながら不覺の至。我が大罪の御詫よりも、差懸るお家の安危。長門守には如何にせし。心許なきことゞもぢやなあ。」

二八　長柄堤の訣別 その二

坪内逍遙

すかしながむる折こそあれ、遙に聞ゆる蹄の音、程もあらせず只一騎、殘霧つんざき一散に汗馬に宙を走り來る木村長門守重成、

長「市正殿に候な。」　市「長門殿、待ちかねしぞ。」

いふ間にかけ寄るくつわづら、右手におり立ち顏見合せ、言葉はなくてそゞろにもまづ袖濡るゝ朝露や、風飄々たる枯柳の枝、入りがたの月ゆらめきて老いゆく秋の淋しさを長柄堤に留むらん。

長「最早豐臣の御社稷も愈〻末となつたるか。棟梁と頼む足下まで、佞人讒者の毒舌に逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは。某圖らぬ事よりして端なくも御母公の御嫌疑蒙り出仕を遠慮のそのひまに思ひ懸けぬ珍變あり。續いて足下に御討手と昨朝承り、大いに驚き、すぐにお表へ參入すれば、城内議論沸くが如く、織田入道殿、日頃に似氣なく激論の末、席を蹴立て、只今退座ありしとばかり。あとは亂脈無法の評定、御母公の威を笠にきる大野・渡邊等が我意暴慢。此の上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹かつ切らんと、二度まで刀の欄に手は懸けしが、貴殿が日頃の教訓を思ひ出して無念を忍び、無實と知つて忠臣を救ひ得ざりし言ふ甲斐なさ。」

織田入道　織田信雄常眞入道。
大野　修理亮治長。
渡邊　内藏介亂。

悔むを且元押宥め、

長「いしくも堪忍せられしぞや。豫ても屢〻申し、如く、お家の大仇は彼等にあらず。鼠輩の爲に命を落すは大忠臣の所爲にあらじ。某とても此の度の一條、遺恨骨に徹すと雖も今更繰返すは愚痴の至。大切なるはお家の後事。某退去の事關東に聞えなば、破綻生ぜんこと治定なるに、昨日までは去就を定めざりし織田殿、已に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆うたかた。大亂破裂せんは目前なり。この上は只偏に籠城の計畫こそ肝要なれ。」長「して籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか。」市「されば、今御城に兵糧・金銀は乏しからず。まつた猛將勇卒にも事かゝねど、得難きは智謀の將なり。某之を慮り、萬一の備をなし置きたり。」長「して其の智謀の將とは。」市「いま九度山に隱れ忍ぶ信州上田前の城主眞田安房守が二男左衞門佐幸村こそ故太閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍師、關ヶ原の一戰以來關東の跋扈を怒り、蟄して世の態を窺ひ居るを先年御味方となし置いたり。事起らば上使を以て急ぎ彼を招かるべし。合戰の進退は一切彼の人に任せられよ。其の他關ヶ原の一亂以後浪々なせし長曾我部盛親、まつた黑田家の浪人後藤又兵衞基次、何れも得易からぬ良將なるが、豫て因みは附け置きたり。上、御使を以て招かせられなば、心を傾け馳せ參ぜん。是、第一の手配りなり。長「してまた籠城となつたる曉、敵を防がん手配りは。」市「そ

九度山　紀伊國伊都郡の山村。眞田安房守名は幸昌。

の儀も豫て地利を考へ、出丸なくては叶ふまじと、前年紀州の山々より材木數多伐出させ、商業の爲といつはり、紀伊川の川上より浪華津に押流させ、御船入に積み置いたり。まつた港口の御庫には、年頃力めて購ひ置きたる數萬俵の糧米あり。籠城數年に亙るといふとも、なほ支ふるに餘あるべし。長「それに加へて、故殿下が貯へ置かれし數萬の金銀、近年御出費嵩むと雖も、尚若干の餘財あり。」市「甲冑・兵具も乏しからず。」長「城は名に負ふ南山不落。」市「眞田・後藤の智勇をもて、此の堅城にたて籠り、忠臣悉く心を一にし、偏に君家を守護するときんば、」長「たとひ關東の老奸雄、利を啗はせ、諸大名を懷け、六十餘州の兵を盡し、四方八面より攻寄すとも、」市「中々三年四年が程には攻落さんこと難かるべし。」長「まつた若年には候へども愈〻軍始りなば、我亦一方を承り、速水・御宿・和久等と共に忠義を金鐵の堅きに比し、命は固より鴻毛の、吹き飜さん白旗は、祖先佐々木が四つ目結、君臣・將士心を一にし、千變萬化の手を盡さば、金石も亦透りぬべし。利欲に集る關東勢、なに退くるに難かるべきや。この上は仰に從ひ、このこと君に言上なし、直に軍の手配りせん。御心安かれ、市正どの。」市「ほゝ賴しゝ、〳〵。只大切は上下の一致、必ず忠勤勵まれよ。とはいひながら、往時に照し、成行く末をかんがみれば、」長「淀の御方の御氣質、社鼠に等しき大野・渡邊。」市「上、御發明に渡らせらるれど、」長「讒佞之を蔽

ふがゆゑ、」　市「地の利はあれども人の和なく、」　長「故太閤が御威武に、をの〻き震ひ打伏せし六十餘州の民草も、」　市「天の時にや、大御所のおのづからなる德風にいつしか靡く世の有樣。」　長「如何なれば、かくまでに、御運かたぶく西天の」

市「有明の影薄れつゝ、」　長「東天紅と八面に、かしましく鳴くくたかけは、」　市「新日、東天に昇るといふ」　長「世の成行の」

兩人「影なるか。」

是非もなき世の有樣と、入る方の月詠め入り、しばしは愚痴にをちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほの〻と明けにけり。市正おもてを正し、

市「萬一にも其の期に至り、百計合期せずば、それまでなり。

當來を誰かは知らん。斃れて後止まんのみ。大丈夫、豈徒に杞憂せんや。後事を足下に託せし上はもはや思ひ殘す事もなし。」　長「して、そこもとにはこれよりして、」　市「居城茨木へ一まづ立越え、」　長「といはるゝは請取りがたし。若しもやこれが今生の、」　市「あゝいや、いさぎよき最期をだに、遂ぐべき機會を失ひし市正が命の拙さ、御詫の名こそ立ため償ひがたき身の大罪。此の身ひとつを兎や角と、千筋に迷ふ心のうち。いやなに心はかりは此の後とても、君の御影につきそひまゐらせ、萬一にも杞憂的中なし、大事去りなん其の時には、」　長「それがしとても事敗れて、御運の末となるときは、此の世の思出、奉公をさめ、關東勢が眞中に、縱横無盡

の血戰なし、花々しく討死なさん」。　市「おゝ勇ましゝ、いさぎよし。それがし存へ、世にあらば、其の目ざましき働をば、餘所ながら見物なさん。尙再會は黃泉にて。まづそれまでは長門どの」。　長「さやうござらば市正どの」。　市「隨分堅固で」、

白倉權六　大野修理亮の家の子。

長「そこもとにも。

惜しきが中の生別離、まことや之に比ぶれば、槃は蜜にや似たるらん。右と左に立別れ、駒引寄せて色代や、悵然たる重成が、乘移りざまふりかへる、堤下に一もとくねり松、あやしの人影、さは曲者と見る間も疾しや打出す手裏劍。あつとたまぎる聲もろとも、ねらひはそれし種が島。どうと大地に白倉權六、

十河　十河十兵衛。

本村　本村清蔭。共に片桐市正の郎黨。

白「且元覺悟」。

と拔きうちの、襟がみつかみ頭顚倒。音きゝつけて物かげより、驚きかけ來る十河・本村。郎黨ども、見かへりもせず乘移る秋さび月毛乘る人の心やいかに白駒の勇むを制するかた手綱、引戻さるゝ後髪。

兩人「さらば」「さらば」。

と西東、見送る方に霧や立つ、眼や曇る、おぼろ〳〵。嘶く駒の聲はして、立別れゆく兩人が此の世に殘す面影は、また見ぬ形とぞなりにける。（桐一葉）

師範學校 國文教科書 本科用 卷三終

音
訓
百濟音

師範學校 國文教科書 本科用 卷三附錄

第三編 漢字の音訓

一 字音

漢字のよみ方には音訓の二樣あり。字音とは漢字本來の發音によりて讀めるものなり。字音はまた單に音ともいふ。字訓とは漢字の意味に相當する國語に譯して讀めるものなり。字訓はまた單に訓又は「よみ」ともいふ。漢字の音として最も早く傳はりたるは百濟の音なるべし。百濟音は支那南方の音かの國に入りて多少の變化を受け

たるものなるべしといふ。

漢字傳來の時代は史に明證なければ詳かならされど、應神天皇の頃に至りては百濟の國より阿直岐・王仁等來りて朝廷に書を獻じ、皇子に書を授けたるほどなれば、學習の道も漸く開けたるべし。

百濟音の如何なるものなりしかは今明かならず。地名の讀方などに殘れるもの或はそれならん。

相模(サガム)　當麻(タギマ)　愛宕(アタゴ)
播磨(ハリマ)　駿河(スルガ)　敦賀(ツルガ)

第二に傳はりたるは吳音なり。吳音とは支那南方の音を我が國に傳へたるものなり。

百濟音の傳はりて後、幾ばくもなくして、支那との交通盛になりゆきたれば、直接に支那南方の音を傳へて、吳音は廣く使用せらるゝやうになりたり。

現に王仁の齎したる論語・千字文などの書名も「ろんご」「せんじもん」と讀みならはしたり。是やがて吳音なり。

男女(ナンニヨ)　文武(モンム)　西京(サイキヤウ)

我が國語に同化せる漢語は吳音によるもの多し。

第三に傳はりたるは漢音なり。漢音は支那北方の音を我が國に傳へたるものなり。

推古天皇以後盛に唐の文化を輸入し、遣唐使・留學生等の唐に赴くや、皆その首府長安に入りて北方の音を學び傳へたり。

男女(ダンヂヨ)　文武(ブンブ)　西京(セイケイ)

吳音と漢音とは字毎に皆異なりといふには非ず。

海川(カイセン)　多少(タセフ)　蘭菊(ランキク)

の如く全く、同じきものも尠からず。

平安朝の初めは尙唐風模倣の世なりしかば、朝廷は屢〻令を下して盛に漢音を奬勵せしかども、吳音の傳來日久しくして、民間通用の音となりたりしかば、漢音は吳音を壓すること能はざりき。されど佛教の語にても、

弘法(コウバフ)　和尙(クワシヤウ)　擁護(ワウゴ)

など漢音に讀む例のあるは、當時漢音奬勵の名殘なるべし。

其の後、漢音は儒書に、吳音は佛書に用ひらるゝこと通例となりたれど、前例の如く、必ずしも截然たる區別あるにはあらず。而して日用語は專ら吳音なるが多し。

唐音

第四に傳はりたるは唐音なり。唐音は宋元明時代の音を我が國に傳へたるものなり。

平安朝の中ごろ遣唐使を廢してより後、國際的交渉は少なくなりたれども、僧侶の佛敎を研究し、商人の貿易を營むが爲に宋元明等に往來せることは絶ゆることなかりき。從つてその時代の音を傳へたるを總じて唐音といふ。こゝに唐とは唐土といはんほどの意にて、唐時代の意にはあらず。されど漢吳音廣く行はれ居るを以て、その後の音即ち唐音は我が國に採用せるもの多からず。

支那音

行燈(アンドン)　和尙(ヲシヤウ)　亭(チン)　鈴(リン)

第五に傳はりたるは支那音なり。支那音とは現在支那に行はるゝ音にて、重に北京の官話なり。

支那音は地名等に用ふるのみにて、他には殆ど行はれず。

上海(シヤンハイ)　廣東(カントン)　哈爾賓(ハルビン)

上述の如く漢字の音には、百濟音・吳音・漢音・唐音・支那音の五種あり。されど我が國に廣く通用せるは漢音・吳音の二種に限れり。

字音

字音は本來彼の土の音によれるものにはあれど、勿論純粹に支那流の發音をなせるものにはあらず、何れも多少國語流に同化せるものなり。こは西洋語を國語に取入れたるランプ・ボートなどの例に於けると同じわけなり。

漢音吳音の識別

漢音・吳音を字毎に識別せんことは容易ならず。美のビ・ミ男のダン・ナンに於けるが如く、漢吳音によりて父音を異にするもの即ち行を異にするものあり。又、間のカン・ケン、生のセイ・シヤウに於けるが如く、母音を異にするもの即ち列

を異にするものあり。中に就きて、一定の法則を立て得べきもの凡そ左の如し。この標準によれば、漢吳音は大半これを識別し得べし。

漢吳音異行 バ行 漢音 マ行 吳音

甲 漢音吳音行を異にするもの（父音を異にするもの）

一 バ行マ行兩音あるものは、バ行は漢音にして、マ行は吳音なり。

漢音バ行Bバン ビ ブ ベウ ボク バ ブツ
吳音マ行Mマン ミ ム メウ モク メ モツ

萬 美 武 妙 木 馬 物

ダ行 漢音 ナ行 吳音

二 ダ行ナ行兩音あるものは、ダ行は漢音にして、ナ行は吳音なり。

漢音ダ行Dダン ヂヨ ヂ ド

男 女 尼 奴

カ行 漢音 ワ行 吳音

吳音ナ行Nナン ニヨ ニ ヌ

三 カ行ワ行兩音あるものはカ行は漢音にして、ワ行は吳音なり。

漢音カ行K(KW) クワ クワイ ケイ
吳音ワ行W ワ エ エ

和 會 慧

ザ行 漢音 ナ行 吳音

四 ザ行ナ行兩音あるものは、ザ行は漢音にして、ナ行は吳音なり。

漢音ザ行Zジ ジン ジヨ ゼン
吳音ナ行Nニ ニン ニヨ ネン

人 如 然

漢吳音異列 ア列 漢音 エ列 吳音

乙 漢音吳音列を異にするもの（母音を異にするもの）

五 ア列エ列兩音あるものは、ア列は漢音にして、エ列

は吳音なり。

馬　下　華　間　山

漢音ア列a an　バ　カ　クワ　カン　サン

吳音エ列e en　メ　ゲ　クエ　ケン　セン

六　ア列オ列兩音あるものは、ア列は漢音にして、オ列は吳音なり。

含　叛　煩

漢音ア列an　ガン　ハン　ハン

吳音オ列on　ゴン　ホン　ボン

七　イ列エ列兩音あるものは、イ列は漢音にして、エ列は吳音なり。

衣　希　氣

漢音イ列i　イ　キ　キ

吳音エ列e　エ　ケ　ケ

八　イ列オ列兩音あるものは、イ列は漢音にして、オ列は吳音なり。

意　音　金　品

漢音イ列i　イ　イン　キン　ヒン

吳音オ列o　オ　オン　コン　ホン

九　イウ韻ウ列兩音あるものは、イウ韻は漢音にして、ウ列は吳音なり。

右　久　流

漢音イウ韻iu　イウ　キウ　リウ

吳音ウ列u　ウ　ク　ル

十　ウ列オ列兩音あるものは、ウ列は漢音にして、オ列は吳音なり。

エイ韻 漢音
ヤウ韻 吳音

エン韻 漢音
オン韻 吳音

文　物

漢音ウ列u　ブン　ブツ
吳音オ列o　モン　モツ

十一　エイ韻ヤウ韻兩韻あるものはエイ韻は漢音にして、ヤウ韻は吳音なり、

兄　生　丁　平

漢音エイei　ケイ　セイ　テイ　ヘイ
吳音ヤウyau　キヤウ　シヤウ　チヤウ　ヒヤウ

十二　エン韻オン韻兩韻あるものは、エン韻は漢音にして、オン韻は吳音なり。

建　遠

漢音エンen　ケン　エン
吳音オンon　コン　ヲン

オウ韻 漢音
ウ韻 吳音

ツ韻 漢音
チ韻 吳音

同字異音

十三　オウ韻ウ列兩音あるものは、オウ韻は漢音にして、ウ韻は吳音なり。

口　頭　奉

漢音オou　コウ　トウ　ホウ
吳音ウu　ク　ヅ　ブ

十四　ツ韻チ韻兩韻あるものは、ツ韻は、漢音にして、チ韻は吳音なり。

一　吉　質　日　八

漢音ツtu　イツ　キツ　シツ　ジツ　ハツ
吳音チti　イチ　キチ　シチ　ニチ　ハチ

漢字には其の意義を異にするに從つてその音を異にするものあり。一々之を區別するは困難なれど、普通に使用するものは之を守らざるべからず。例へば左の如し。

慣用音

善惡 安樂 計畫 貿易 興敗 出藍 暴徒
アク ラク クワク エキ コウ シュツ バウ

好惡 音樂 圖畫 容易 興味 出納 暴露
フ ガク グワ イ キョウ スイ バク

漢字の本音にはあらねど、我が國にて普通に行はるゝ音あり。之を慣用音といふ。慣用音は必ずしも排すべからず。

喫煙 輸入 駐劄
本音 ゲキ シュ タフ
慣用音 キツ ユ チツ

二 字訓

字訓は漢字を國語に譯讀せるものなり。漢字は一字にして一義なるあり、多義なるあり。從つて字訓も一なるあり、

一字一訓

一字數訓

訓に似たる音

多くなるあり。

日(ひ)　月(つき)　人(ひと)　心(こゝろ)

右は一字にして一訓なるものなり。

先 {まづ(副詞)、さき(名詞)、さきんず(動詞)}

悲 {かなし(形容詞)、かなしむ(動詞)、かなしみ(名詞)}

行 {ゆく(動詞)、おこなふ(動詞)、やる(動詞)、ゆき(名詞)、おこなひ(名詞)}

右は一字にして數訓なるものなり。

國語の書き方にては用言の語尾などには漢字の下に假名を送りて「悲し」「行く」「先づ」など書くを例とす。是國語は漢語とその性質を異にするが故に送假名の必要あるなり。

その實字音なれど、早くより用ひ慣れて國語に同化し、今は殆ど訓の如く見ゆるものあり。但しその語は多からず。

漢語の熟字
一 音讀
二 訓讀
い 原訓
ろ 特訓

繪(エ)　錢(ゼニ)　菊(キク)　鉢(ハチ)

漢語の熟字は音讀するは當然なれど、之を國語に訓讀するに、原字の儘讀み連ぬるものと特殊の訓讀するものとあり。

山川(やまかは)　春秋(はるあき)　人心(ひとごゝろ)

右は原字のまゝの讀み方なり。

伯父(をぢ)　紫陽花(あぢさゐ)　八角金盤(やつて)

右は特殊の訓なり。

外國語を表記するために漢字を結合せる熟字あり。

國語の熟字
一 原訓
二 特訓
三 音訓
い 湯桶讀
ろ 重箱讀
四 音讀

墜道(トンネル)　燐寸(マッチ)　麵包(パン)

これらは何れも近時の漢熟語なり。

又國語を寫すに、二字以上の漢字を連ねて熟字を作ることあり。而してその訓み方にも二樣あり。

手形(てがた)　爲替(かはせ)　山櫻花(やまざくらばな)

右は原字のまゝの讀み方なり。

流石(さすが)　時鳥(ほとゝぎす)　五月雨(さみだれ)

右は特殊の讀み方なり。

本來の國語と漢語とを連ねて作れる熟語は音訓交へ讀まざるべからず。

訓音　敷地(しきチ)　小僧(こゾウ)　手燭(てシヨク)

奥行　緣側(エンがは)　頭取(トウどり)

音訓　俗に前者を湯桶讀後者を重箱讀といふ。

右の如き本邦にて作れる熟語は國語にて讀むべく、字音にて連讀すべからず。

この外、本邦にて作れる熟語にて音讀するものあり。

殘念(ザンネン)　心配(シンパイ)　難儀(ナンギ)

その中には國語にあてたる漢字を更に音讀したるが、後には通用の熟語となれるものあり。

をこ　ものさわがし　おなじことわり

尾籠　物騷　同斷

ビロウ　ブッサウ　ドウダン

同熟字異義
一音二訓
三音訓
四雜

同一の漢字を用ひたる熟字にしてその讀方によりて意義を異にするものあり。これを四種に分つ。

工夫　利益　博士

コウフ　リエキ　ハクシ

クフウ　リヤク　ハカセ

右は共に音讀なれど意義異なり。

見合　預主　心遣

みあひ　あづけぬし　こゝろやり

みあはせ　あづかりぬし　こゝろづかひ

右は共に訓讀なれど意義異なり。

見物　間數　目下

ケンブツ　ケンスウ　モクカ

みもの　まかず　めした

右は音讀と訓讀とにて意義異なり。

讀本　可成　出立

トクホン　カなり　シュッたつ

よみホン　なるべく　いでたち

右は音訓雜糅して意義異なり。

當字
一音
二訓
三音訓

當字とは漢字の本義によらず我が國にて只その字音又は字訓の呼聲を借りたる用字をいふ。畢竟六書の假借に相

當するものなり。

甲斐(カヒ)　屹度(キツト)　左様(サヤウ)

丁度(チヤウド)　兎角(トカク)

右は字音を用ひたる當字なり。

兼(かねて)　吳(くる)　覺束なし(おぼつかなし)　仕舞(しまひ)　見舞(みまひ)　矢張(やはり)

右は字訓を用ひたる當字なり。

左程(サほど)　馬鹿(バか)　目出度(めでタク)

右は音訓混用の當字なり。

是等の當字は一般に慣用するものなれば、之を用ふるも妨なし。唯相當なる漢字あるに拘はらず、勝手に當字を作りて濫用するはあるまじきことなり。相當の漢字の知り難き場合には寧ろ假名書きにすべし。

和字

漢字になき和字

三　和字

和字とは我が邦にて漢字の結構に倣ひて作れる文字なり。天武天皇の時、新字を作れりといへど、その文字の如何なるものなりしかは明かならず。今日通用する和字には古きものあり、又新しきものあれど、その便利なるものは之を用ふるも妨なし。

普通に用ひらるゝ和字は左の如し。

俤　働　凩　凪　峠　叺　噺　杣　枡　榊　樅　樫

峯　畑　畠　怺　襷　躾　軈　込　辻　迚　迯

鎹　鑓　閊　靭　颯　鱈　鰯　鰆　鳰　鴫

右は何れも二字の意を合せて作れる和字にて、所謂會意の文字なり。訓ありて音なし。

たゞ働の字は近來「自働」「勞働」など用ひてドウの音を附することゝなれり。

同形の漢字ある和字

鋲は諸聲の和字ともいふべし。麿杢は合字なり。

伽 偲 咄 嘸 捉 椿 榎 柊 樋 沖 澪 萩

錆 鰹 鴨 鶸 鵺

右は本邦にて製作せる會意の和字にして、漢字に同形の字あれど偶合なるべし。

洋語和字

粂 扨 槇 は二字の音又は訓を合せたる合字なり。

狆 燗 は諸聲の和字なり。何れも同形の漢字ありといへど、偶合と見るべきなり。

哩 呎 吋 粍 粁 瓩

などは西洋の數詞を寫す爲に作れる一種の和字なり。

師範學校 國文教科書 本科用卷三附錄終

文部省檢定濟

大正八年一月十日 師範學校國語科教科書

明治三十六年十二月五日印刷
明治三十七年二月八日發行
明治四十二年三月廿九日訂正再版發行
明治四十五年十一月十六日訂正十二版發行
大正七年十一月廿七日修正十六版印刷
大正八年一月二日修正十八版印刷
大正八年一月五日修正十八版發行

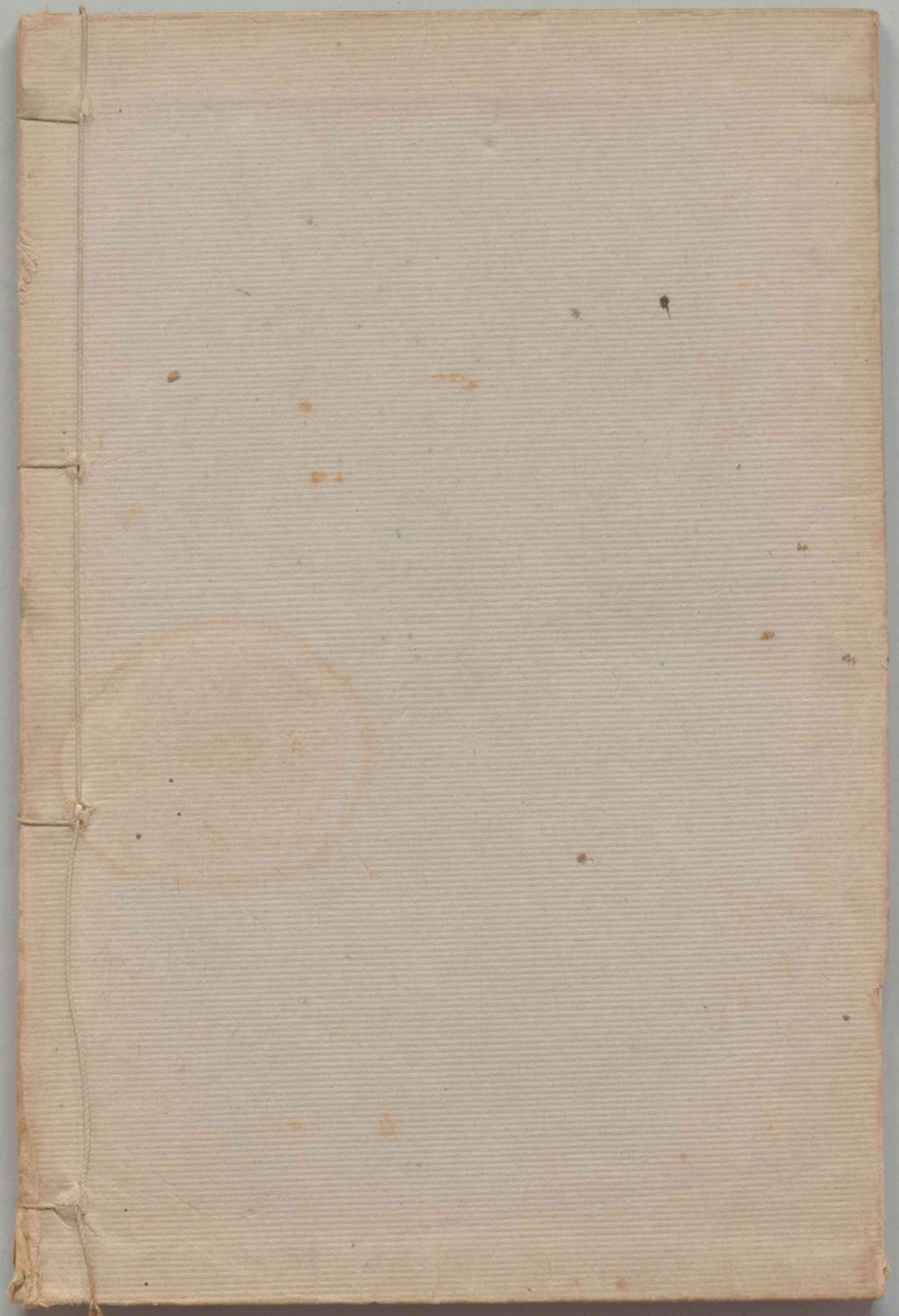
東京市小石川區高田老松町五十二番地
編者 吉田彌平

東京市神田區通神保町六番地
發行者 上原才一郎

東京市神田區通神保町六番地
發行所 光風館書店
（電話神田三千八十七番）
（振替口座東京三二七番）

東京市神田區裏神保町六番地
印刷者 四海民藏

定價 金參拾五錢
大正十二年度臨時定價 金六拾錢

所有 著作權

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直に御送附可致候